ISSN 1884-1562

フィロロギカ——古典文献学のために

VIII

目次

『アエネーイス』における「葬礼」 1
高橋宏幸

研究ノート

『イーリアス』におけるトロイア方援軍の言葉
——小アジア沿岸の旅から—— 25
細井敦子

Shorter Note

プラトン『パイドン』62A の "ἔστιν ὅτε καὶ οἷς" 47
納富信留

2013
フィロロギカ編集委員会

（編集責任）
『フィロロギカ』編集委員会
事務局長　葛西康徳
名誉編集委員　久保正彰、Elizabeth CRAIK
編集委員　安西眞、大芝芳弘、高橋宏幸、納富信留、佐野好則

フィロロギカ　第VIII号

『アエネーイス』における「葬礼」

高橋宏幸

1　問題の所在

『アエネーイス』の結末場面でトゥルヌスは「私を、あるいは、そうしたいなら、命の光を奪い取ったあとの体だけでもよい、わが一族に返してくれ」(me, seu corpus spoliatum lumine mauis, redde meis 12.936f.) と嘆願する。この言葉について、Tarrant は最新の注釈書において、トゥルヌスの主眼が命乞いにあり、「殺したあと」というもう一つの選択肢は厚かましさを可能なかぎり避ける意味合いしかないという趣旨の注を付している[*1]。この理解はおそらく大方の賛成を得るところと思われる。というのは、Tarrant が退ける別の理解として、ここにはトゥルヌスの死を意に介さない潔さが表現されているという見方も他方にはある[*2] が、その見方に従えば、トゥルヌスの嘆願に続いてのアエネーアースの躊躇から止めを差すときの激しい怒りへという展開が不自然になってしまう、言い換えれば、躊躇や怒りは命乞いに対する反応として自然であると考えられるからである。少なくとも、アエネーアースがトゥルヌスの言葉を命乞いと受け取ったのは間違いない[*3]。

しかし、その一方で、遺体を自分の一族に返してくれ、という言葉が遺体返還によって可能になる葬礼を含意すると考えられることに注意するとき、そこに実質的な意味がほとんど込められていないということには違和感を覚える。それには三つの面がある。

一つは『イーリアス』との関連である。指摘されるように、『アエネーイス』の結末場面はアキレウスがヘクトールを倒す『イーリアス』第 22 歌を踏まえる。そこでは、ヘクトールがアキレウスの槍によって喉元に致命傷を負い[*4] ながら、喉笛を切られなかったた

---

*1 Tarrant, 332f. Cf. Serv. ad loc. "ne ex aperto rem viro forti pudendam peteret, interpositione usus est, dicens 'seu corpus spoliatum lumine mavis'"; Donat. ad loc. "cum dicit seu, … pudore interveniente non dixit apertius."

*2 Heyne ad loc. "viro forti digna oratio; aperte mortem non deprecatur: vitae tamen usum nec renuit." Conington ad loc. "the passage finely expresses indifference to death and thought for his parent's grief."

*3 ただ、アエネーアースのこの認識が正しいかどうかは分からない。この点にはあとに立ち戻る。

*4 槍の射貫いた箇所は「どこよりも速く命を滅ぼす」(Hom. *Il.* 22.325) とされ、ヘクトールの嘆願は自身の死を前提としている。そこに『アエネーイス』の場合との大きな相違がある。ただ、『アエネーイス』でも、トゥルヌスを大地に沈めたアエネーアースの槍は「運命の槍」(fatale telum 12.919)、「忌まわしい破滅を運ぶ槍」(exitium dirum hasta ferens 924) と、致命傷を負わせる力があるかのように語られている。この点もあとに立ち戻る。

ために最後の言葉を発することができ、身代金を受け取ってトロイア人が荼毘にふせるよう遺体を返してくれ、と嘆願する（Hom. *Il.* 22.337–43）。これをアキレウスは一顧だにせず、遺体は犬や鳥に喰わせる、と告げる（Hom. *Il.* 22.335f., 345–354）。ここに示される英雄の激しい怒りが――ヘクトールの遺体をさんざんに痛めつけたのち――最後には神々の意向を受けたプリアモスの嘆願の前に区切りをつけ、作品はヘクトールの葬儀をもって結ばれるので、「遺体返還」と「葬礼」は『イーリアス』において詩全編を大団円に導くモチーフであると考えられる。そのような重要なモチーフに言及しながら、ウェルギリウスがそこに実質的含意を込めなかったというのは奇妙なことに思われるのである。加えて、『イーリアス』においてヘクトールの「葬礼」がアキレウスの怒りの終わりからトロイア陥落に帰結する戦争の終わりまで、そこに叙事詩が主題とした一つの出来事の完結を強く印象づけるのに対し、『アエネーイス』の結末がそれとは対照的であることも注意を引く。多くの人が感じる唐突さ、ないし、未完結の印象は――葬礼も含めた――トゥルヌスの死後について一切が捨象されたことと関係しているようにも想像されるのである。

いま一つの面は『アエネーイス』の中での「葬礼」のモチーフの使われ方に関わる。トゥルヌスの葬礼について語られることはないものの、すぐあとに見るように、詩編全体を通じて「葬礼」は特徴的な使われ方をしており、作品の主題である「ローマ建国」とも深く関わる要素が認められるように思われる。その中からここでは、それが象徴的に現われていると思われる例に一つだけ触れておく。作品の後半、いわゆるイーリアス的部分が始まる第 7 歌の冒頭にはアエネーアースの乳母であるカイエータへの葬礼が置かれている（7.1–7）。『アエネーイス』各歌のうちで登場人物への言及から始まるのは――序歌を別とすれば――、この他に第 4 歌（ディードー）と第 12 歌（トゥルヌス）しかない。第 4 歌と第 12 歌の場合がそれぞれの主人公を示す[*5] とすれば、第 7 歌の場合には、とりわけ作品後半における「葬礼」の重要性を予示するものであるようにも想定される。この点で、結末でのトゥルヌスの嘆願が葬礼に関わる言及をしながら、十分な意味づけをもたないというのは首尾の不一致という点である種の齟齬を生じているように見える[*6] のである。

[*5] Cf. Austin, 25, Tarrant, 83.

[*6] 後半の序歌は第 7 歌の冒頭から 37–45 行へ後置されている。このことから、一方で、この序歌を後半の始まり（Serv. 7.37 "hinc est sequentis operis initium; ante dicta enim ex superioribus pendent"）とすればカイエータの場合をディードーやトゥルヌスの場合と同列にはできないと考えられるかもしれない。しかし、他方、アエネーアースがカイエータの港に向かったことを語って第 6 歌が終わり、第 7 歌が乳母カイエータへの葬礼で始まること、つまり、歌と歌が連接し、明瞭な区切りのない始まり（Nishimura-Jensen, 176 によると、Kyriakidis が第 5 歌と第 6 歌のあいだでもパリヌールスについて同様の構成があり、第 6 歌がその前後いずれにも開かれていることを指摘しているというが、筆者未見）に留意すると、それが結末での未完結の印象と奇妙に符合することが気づかれる。

さらに、三つ目の面として、結末場面の中でも、アエネーアースの槍がトゥルヌスを地面に倒したときになされる

> consurgunt gemitu Rutuli totusque remugit
> mons circum et uocem late nemora alta remittunt. (12.928f.)
> ルトゥリー人らは呻きを上げて立ち上がる。それに周囲の山全体が反響し、嘆声が森深くに広くこだまする。

という叙述には葬礼を思わせる情景を認めることができる。ルトゥリー人らは死の瞬間のトゥルヌスと同じように「呻き」(gemitu 928, 952; cf. 722)[*7] を上げながら、トゥルヌスが「倒れ伏した」(incidit ad terram 926f., humilis 930) のと対照的に「立ち上がる」(consurgunt 928)。あたり一帯にこだまするような大きな嘆きはあたかもすでにトゥルヌスの死に哀悼を表し始めたかのようにも見える。その点で、トゥルヌスが嘆願の中でルトゥリー人をアウソニア人と言い換えながら、

> uicisti et uictum tendere palmas
> Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx, (12.936f.)
> おまえの勝ちだ。敗者の掌を差し伸べる私をアウソニア人らも見届けた。ラーウィーニアはおまえの妻だ。

と述べる言葉が第 12 歌冒頭での

> 'aut hac Dardanium dextra sub Tartara mittam
> desertorem Asiae (sedeant spectentque Latini),
> et solus ferro crimen commune refellam,
> aut habeat uictos, cedat Lauinia coniunx.' (12.14–17)
> 「この右手がダルダニア人をタルタラの底へ送り込んでやるか——アジアの逃亡兵の末期をラティウムの民は座って見物していればよい、私一人が剣でわれわれすべてにかかった嫌疑を晴らしてやる——、さもなくば、敗れて、ラーウィーニアをあの男の妻に譲るか、だ。」

という一騎打ちの宣言と対応していることも注意を引く。その言葉どおりにいまルトゥリー人らは一騎打ちの結果を見届けた。結果がトゥルヌスの討ち死にであれば、その弔い

---

*7 gemo, gemitus の作品中の用例 39 のうち、死の瞬間を表す場合が 4 例 (10.674, 11633, 11.831, 12.952)、死者への哀悼を表す場合が 11 例 (1.221; 1.485 (Hector); 4.667, 687 (Dido); 6.209 (Misenus); 9.499 (Euryalus); 10.465, 505, 843, 11.37, 95 (Pallas); cf. 2.323, 2.486) 見られる。

をするのは彼らのはずである。とすると、トゥルヌスの葬礼は描かれなくても、葬礼を施す人々の姿は結末場面に描き込まれていることになる[*8]。

そこで、以下には、『アエネーイス』に現れる「葬礼」のモチーフを検討[*9]し、これを踏まえて、あらためて結末場面での「遺体返還」と「葬礼」の問題を考える[*10]。

2 「葬礼」

2.1 基本的通念

まず、よく使われる「葬礼」のモチーフを確認しておく。その一つは、死者の霊は埋葬を施されないかぎり、彼岸へ渡って平安を得ることができないため、葬礼を乞い求めるというもので、『アエネーイス』でも第6歌に用いられる。冥界に降り、ステュクスを渡ろうとしたアエネーアースがパリヌールスの霊を見つけて声をかけると、パリヌールスは海に沈められた経緯を答えたうえで、

> 'eripe me his, inuicte, malis: aut tu mihi terram
> inice, ...
> sedibus ut saltem placidis in morte quiescam.' (6.365f., 371)
> 「不敗の英雄よ、この災厄から救い出してくれ。あなたの手で私を土に葬ってくれ。……せめて平穏な場所で死後の安らぎを得られようから。」

と埋葬を求める。

死者の霊が平安を得ることは、翻って、遺族への慰めとなる。パッラースを倒したトゥルヌスはアルカディア人らに向かって

> 'memores mea dicta referte
> Euandro: qualem meruit, Pallanta remitto.

---

*8 そう理解したかどうかは分からないものの、Maffeo Vegio (Maphaeus Vegius, 1407–58) によるいわゆる『第13歌』125–301には、ルトゥリー人によるトゥルヌスの遺体のアルデアへの移送とそこでの葬儀が描かれた。

*9 管見のかぎり、これまで「葬礼」が作品全体にもつ意味に目を向けた研究はほとんどなかった。Castroは、作品中もっとも際立つ葬礼であるアンキーセース法要が作品の流れと整合的であることを論じている点で、その一つに数えてよいかもしれないが、「葬礼」そのものを問題とはしていない。

*10 『アエネーイス』の結末場面は作品理解のもっとも重要な鍵であることが疑いない一方、読む者をもっとも当惑させてきた箇所でもある。この場面を論者はこれまで二つの論考（高橋（2003), (2011)）において検討した。本論もそれらの議論に連なるものだが、ある種の循環論を避けるため（と同時に、錯綜した問題に対して観点を限定するため）、これまでの議論については最後に触れることにする。

quisquis honos tumuli, quidquid solamen humandi est,
largior.' (10.491–494)
「わが言葉を忘れずに伝えよ、エウアンドルスへと。彼のせいだ、パッラースをこのような姿で送り返すのは。どのような墳墓を栄誉とし、どのような埋葬を慰めとするも好きにせよ。」

と語り、アエネーアースは自分が討ち果たしたラウススに対し、

'quid tibi nunc, miserande puer, pro laudibus istis,
quid pius Aeneas tanta dabit indole dignum?
arma, quibus laetatus, habe tua; teque parentum
manibus et cineri, si qua est ea cura, remitto.
hoc tamen infelix miseram solabere mortem:
Aeneae magni dextra cadis.' (10.825–830)
「憐れむべき子よ、いま、おまえの功しに何を報いようか。敬虔なアエネーアースは何を与えれば、これほどの心ばえに似つかわしいか。おまえが喜びとした武具はとっておけ。おまえを父祖の霊と灰のもとへ送り返してやろう、それが心遣いとなるのなら。悲運とはいえ、このことを哀れな死の慰めとするがいい、大いなるアエネーアースの右手により討たれたことを。」

と語りかける。

そして、葬儀は言うまでもなく死者に永遠の別れを告げる場である。死者の霊は彼岸へ旅立ち、残された者は悲嘆に区切りをつける。アエネーアースがパッラースの遺体を父エウアンドロスのもとへ送り出すとき、

mille uiros qui supremum comitentur honorem
intersintque patris lacrimis (11.61f.)
千人の勇士を遣わして、最後の儀礼に供をさせ、父と涙を分かち合わせる。

また、

harum (sc. uestium) unam iuueni supremum maestus honorem
induit (11.76f.)
そのうちの一着を若者への最後の儀礼の品として悲嘆にくれながらまとわせる。

と語られ、英雄は

'salue aeternum mihi, maxime Palla,
aeternumque uale.' (11.97f.)
「永遠にさらばだ、偉大なるパッラースよ。永遠の別れだ。」

と呼びかける。以後は二度とまみえることのない「最後」が強調されている。それは次の戦いに進むために悲しみに区切りをつけるという点で告別は慰めと表裏一体のものと理解される。第6歌でいわゆるローマの英雄のカタログの最後に置かれた青年マルケッルスの場面もこれに連なるものと考えてよいかもしれない。そこではアンキーセースがマールスの野で営まれた盛大な葬儀に言及し（6.872–874）、期待を一身に背負った青年の夭折を惜しむ（870f., 875–882）。

さらに、葬礼が競技祭の形を取る場合がある。『イーリアス』第23歌はパトロクロスの葬儀に続いて全体の三分の二以上が彼の霊に捧げた競技祭から構成されている。『アエネーイス』でもこれをモデルに第5歌でアンキーセース一周忌法要の競技祭が描かれる。

2.2 永遠の記憶

以上が「葬礼」の一般的通念にそった用例とすると、以下に挙げる例には作品に特徴的と思われる使われ方が認められる。

上に見たパリヌールスの嘆願に対して、彼が埋葬も済まぬうちに彼岸へ渡ろうと逸っていることから、アエネーアースに同行するシビュッラがその叶わぬ望みを戒めたのち、

'sed cape dicta memor, duri solacia casus.
nam tua finitimi, longe lateque per urbes
prodigiis acti caelestibus, ossa piabunt
et statuent tumulum et tumulo sollemnia mittent,
aeternumque locus Palinuri nomen habebit.' (6.377–81)
「いま言うことを聞いて胸に刻み、辛いめぐり合わせの慰めとせよ。おまえのため、土地の人々が遠くからも、あちらこちらの町々からも天上の前触れに促されて集まり、遺骨の清めを施すであろう。塚を立て、塚に供物を捧げるだろう。その場所はパリヌールスの名を永遠にとどめるであろう。」

と告げる。葬儀における死者との身体的な別れが永遠である一方で、葬礼は死者に対する記憶を永遠にこの世に留めるとされている。同様の例はミーセーヌスと、上にも触れたカイエータの場合に見られる。

at pius Aeneas ingenti mole sepulcrum
imponit suaque arma uiro remumque tubamque
monte sub aërio, qui nunc Misenus ab illo
dicitur aeternumque tenet per saecula nomen. (6.232–35)
さて、敬虔なるアエネーアースは墓所を高く築き上げ、勇士の武具、櫂、ラッパを納める。その上に聳え立つ山はいま、勇士にちなんでミーセーヌム岬と呼ばれ、幾世紀にわたり永遠にその名をとどめている。

Tum se ad Caietae recto fert limite portum.
ancora de prora iacitur; stant litore puppes.
Tu quoque litoribus nostris, Aeneia nutrix,
aeternam moriens famam, Caieta, dedisti;
et nunc seruat honos sedem tuus, ossaque nomen
Hesperia in magna, si qua est ea gloria, signat.
At pius exsequiis Aeneas rite solutis,
aggere composito tumuli, postquam alta quierunt
aequora, tendit iter uelis portumque relinquit. (6.900–01, 7.1–7)
それから彼(アエネーアース)はまっすぐにカイエータの港へ向かう。舳先から錨が投げられ、船が岸に並ぶ。アエネーアースの乳母よ、あなたをもまた、われらの岸が永遠に伝えるよう、死とともにカイエータの名を残した。いまも、あなたに捧ぐ栄誉がこの場所を守る。その名が、ささやかな栄光ではあれ、大いなるヘスペリアの中に遺骨の在りかを示す。さて、敬虔なるアエネーアースは、しきたりどおりに葬礼を果たし、墓所の盛り土を築いてから、沖の水面が静まったのち、帆を張って出航し、港をあとにする。

三人の死は、アエネーアース一行がイタリア本土へ到着する前にネプトゥーヌスによって「ただ一人だけ、潮の渦に失われる者があり、捜索することになろう。このただ一人の命が大勢の身代わりとなろう」(5.814f.)と予言されたパリヌールスの場合に明瞭なように、「ローマ建国」という使命達成に向けて必要とされた犠牲であると考えられる。その報いとして名前が地名に冠せられることは、それぞれの人物に対する敬意をローマの国と歴史の中に刻むものとして理解される。

「葬礼」が建国事業の犠牲者への永遠の記憶を含意するもっとも顕著な例としてニースとエウリュアルスの場合を挙げることができる。悲劇に終わる果敢な試みの前にニースはエウリュアルスに向かって、

sit qui me raptum pugna pretioue redemptum
mandet humo, solita aut si qua id Fortuna uetabit,
absenti ferat inferias decoretque sepulcro. (9.213–215)
「私なら、誰かが屍を戦場から救い出すか、身代金で買い戻すかして土に葬ってくれればよい。それも運の女神がいつものように許さぬなら、遺骸のないまま葬儀を出し、墓に祀ってもらえればよい。」

と語っていた。攻め寄せるルトゥリー軍の先頭で槍先に晒し首となった（9.465–467）二人にどのような弔いがなされたかは語られない一方、代わりに詩人は自身の声で彼らに呼びかける。

Fortunati ambo! si quid mea carmina possunt,
nulla dies umquam memori uos eximet aeuo,
dum domus Aeneae Capitoli immobile saxum
accolet imperiumque pater Romanus habebit. (9.446–49)
幸せなる二人よ。私の歌にいかばかりかの力があるなら、いつの日にも、そなたらは決して忘られず、後世に伝えられよう、アエネーアースの家がカピトーリウムの揺るぎなき巌に構えられ、ローマの父が覇権を握っているかぎりは。

叙事詩の語り自体が二人の記憶をローマとともに留める葬礼であるかのようである[*11]。

2.3 葬礼の拒絶：癒えることのない悲憤

『イーリアス』では、ヘクトールの嘆願をアキレウスは一顧だにせず、遺体を激しく痛めつけるものの、最後にはプリアモスの嘆願を聞き入れ、ヘクトールの葬儀を執り行なうことを許す。葬礼の拒絶が激しい怒りを表わすとともに、葬礼が施されるとき、そこに怒りについて一定の終息が示されている。『アエネーイス』でも、葬礼の拒絶が激しい怒り（ira）、ないし、悲憤（dolor）を表わす例が見られる。ただ、その終息については明示されない。そこに違いがあるように思われる。

ディードーはアエネーアースに対する怒りに発する呪詛の中で

[*11] Duckworth は二人の死が気高い目的をもちながら誤った行為に走った結果によって第 9 歌から第 12 歌の出来事、とりわけ furor に導かれたトゥルヌスの死を準備していると論じた。この見方に立った場合、二人の死に詩人から葬礼に相当する詩句が捧げられるのであれば、トゥルヌスの死にも同様のことが想定されて不思議はないことになる。

'sed cadat ante diem mediaque inhumatus harena.
haec precor, hanc uocem extremam cum sanguine fundo.
'tum uos, o Tyrii, stirpem et genus omne futurum
exercete odiis, cinerique haec mittite nostro
munera. nullus amor populis nec foedera sunto.
exoriare aliquis nostris ex ossibus ultor
qui face Dardanios ferroque sequare colonos,
nunc, olim, quocumque dabunt se tempore uires.
litora litoribus contraria, fluctibus undas
imprecor, arma armis: pugnent ipsique nepotesque.' (4.620–29)
「時いたらずに倒れて、砂地のあいだに埋葬もされませぬよう。これが私の祈り、これが最期の声、血とともに注ぎ出す。それに、さあ、テュロスの人々よ、彼の子ら、将来の血統のすべてをあなた方は憎悪の念で悩まし続けよ。わが灰にこれを手向けて供物とせよ。いかなる愛も盟約も両国民のあいだにあってはならぬ。立ち上がれ、そなた、まだ見ぬ者よ、わが骨より出て復讐者となれ。火と剣をトロイアの移民のうしろから突きつけるのだ、いまも、このさきも、いつであれ、もてる勢力があるときには。海岸が海岸と、波が波と敵対し、武具が武具と敵対するよう祈る。戦い続けよ、彼ら自身も、その子孫も。」

と語る。怒りは直接の標的であるアエネーアースを越えてはるか遠くローマに向けられている。

また、女戦士カミッラを討ち果たしたアッルンスの場合、女神ディアーナの意向を受けたニンフのオーピスが

'huc periture ueni, capias ut digna Camillae
praemia. tune etiam telis moriere Dianae?'
「こちらへ来て身を滅ぼせ。受け取るのだ、カミッラにふさわしい褒美を。おまえでもディアーナの武器で死ねるのだ。」

という言葉とともに必殺の矢を射当てると、

illum exspirantem socii atque extrema gementem
obliti ignoto camporum in puluere linquunt;
Opis ad aetherium pennis aufertur Olympum. (11.865–67)
彼が息絶えようとし、最期の呻きを洩らすのに仲間たちは目もくれず、平野の見知

らぬ砂塵の上に置き去りにする。オーピスは天高きオリュンプスへと翼を羽ばたかせて去る。

上に見たように、葬礼が死者に対する永遠の記憶を残し、その名前を伝えもするのに対し、アッルンスは「忘れ去られ」(obliti 866)、打ち捨てられた砂地は「無名の」(ignoto 866) と言われる。このように処断したのが永遠の存在たる女神であるとすれば、その怒りはいつまでも決して解けないかのような印象を受ける。

2.4 死者への誉れ：復讐

こうした怒りや悲憤は自然な心の動きとして復讐を希求する。そして、復讐を果たすことが死者への誉れをなすという例が見られる。

上に引用したディードーの呪詛にはこの面が顕著である。それは「わが灰にこれを手向けて供物とせよ」(cinerique haec mittite nostro / munera 4.623f.)、「立ち上がれ、そなた、まだ見ぬ者よ、わが骨より出て復讐者となれ」(exoriare aliquis nostris ex ossibus ultor 4.625) という言葉に端的に現われている。

また、アッルンスを倒したオーピスはディアーナ女神から次のような指示を受けていた。

> 'haec cape et ultricem pharetra deprome sagittam:
> hac, quicumque sacrum uiolarit uulnere corpus,
> Tros Italusque, mihi pariter det sanguine poenas.
> post ego nube caua miserandae corpus et arma
> inspoliata feram tumulo patriaeque reponam.' (11.590–94)
> 「これを取れ。矢筒より復讐の矢を繰り出せ。誰であれ神聖な体に傷を負わせる瀆神を働いた者には、この矢により、トロイア人もイタリア人も区別なく、血の報いを払わせよ。そのあとは、私が雲に包んで彼女の哀れな遺体を、武具を剥がれぬうちに、墓所へと運ぶ。祖国へ届けるであろう。」

カミッラの仇討ちはオーピスが果たす一方で、遺体の送り届けはディアーナみずから行なうという。ここで、この箇所のモデルとされる『イーリアス』第 16 歌 666–683 行の場面との比較が有益であるかもしれない。そこでは、パトロクロスに討ち取られ、武具を剥がれたサルペードーンのために、ゼウスがアポッローンに命じて遺体を故国リュキアへ運ばせる。「その地で彼を兄弟や仲間らが懇ろに葬り、塚を築いて碑を建てよう。それが死者への誉れであるから」(Hom. *Il.* 16.674f.) であった。これに先立ってゼウスはその場でヘ

クトールにパトロクロスを討たせようかと思案もするが、結局、それを思いとどまった(ibid. 646ff)。これと比べて、『アエネーイス』の場合、他の者に任せずディアーナ自身が遺体を送り届ける点で弔いの重みが増していると同時に、仇討ちが即座に果される点で葬礼と復讐が密接に関連づけられているように思われる。実際、カミッラの討ち死にを見届けたオーピスは次のように語る。

> 'non tamen indecorem tua te regina reliquit
> extrema iam in morte, neque hoc sine nomine letum
> per gentis erit aut famam patieris inultae.
> nam quicumque tuum uiolauit uulnere corpus
> morte luet merita.' (11.845–49)
> 「それでも、そなたの女王はそなたが面目を失ったままにはしなかった、すでに死の瀬戸際にあるとはいえ。この死は必ずや名を上げよう。諸国に広められよう。報いを果たせぬ女との世評を立てられもしまい。誰であれ、そなたの体に傷を負わせる瀆神を働いた者は相応の死で贖うことになろうから。」

ここには、復讐の果されることが死者の誉れとして強調されている。

いま一つ同様の例として、息子パッラースの遺体と対面したときにエウアンドロスが使者にアエネーアースへの伝言として語った言葉を挙げることができる。

> 'quod uitam moror inuisam Pallante perempto
> dextera causa tua est, Turnum gnatoque patrique
> quam debere uides. meritis uacat hic tibi solus
> fortunaeque locus. non uitae gaudia quaero,
> nec fas, sed gnato manis perferre sub imos.' (11.177–81)
> 「パッラースが命を落としたいま、なぜ厭わしき生に留まるかと言えば、あなたの右手ゆえだ。トゥルヌスに対し息子と父とのため、果たすべき務めをご存じであろう。それだけが唯一、あなたの手柄にも武運にもまだ欠けている。私が求めるのは生の喜びではない。それはかなわぬ。ただ、息子に知らせを届けたいのだ、冥界の底まで。」

ここでは、息子の仇討ちが果されることをこの世で見届け、その知らせをみずから届けることが供養とされている。このエウアンドロスの思いが結末場面でのアエネーアースによるトゥルヌスへの止めに通じていることは疑いないと思われるが、この点はあとに述べる。

3 永遠の憎悪と悲憤

上には、「葬礼」をめぐって、単にそれが死者にも残された者にも魂の平安をもたらすという以外に、永遠の記憶、怒りと悲憤、復讐といった要素が表現に与っていることを見た。結末場面の検討に移る前に、ここで注意しておきたいのは、それらの要素が作品の根幹と深く関わるものであるように思われることである。

序歌において、アエネーアースの苦難の原因は「非情なユーノーの解けぬ怒りゆえ（saeuae memorem Iunonis ob iram 1.4）と言われ、女神の「怒りと非情な痛憤のもとは心から消えていなかった」（necdum etiam causae irarum saeuique doloris / exciderat animos 1.25f.）と語られる。そして、このことは序歌の直後にも、。

> Iuno aeternum seruans sub pectore uulnus
> haec secum: 'mene incepto desistere uictam
> nec posse Italia Teucrorum auertere regem!
> quippe uetor fatis.' (1.36–39)
> いつまでも消えぬ恨みを胸に抱くユーノーは心中に言った。「負けたのか、私は。事を仕遂げることを諦めるとは。テウクリア人の王をイタリアから遠ざけられないとは。」

というように、繰り返し強調されている。

このように、決して忘られることがないとして提示されたユーノーの怒りと悲憤は、作品の結末を前に、ユッピテルとの取り引きの場面で終息するかに見える。ここでユーノーにユッピテルは「いまや、どのように終結させるのだ、后よ。最後に残るのは何だ」（quae iam finis erit, coniunx? quid denique restat? 12.794）と切り出し、「いまはもう、やめるがよい。……黙したまま、それほどの悲憤に身を苛むな」（desine iam tandem ... ne te tantus edit tacitam dolor 800, 801）、「これでもう最後だ」（uentum ad supremum est 803）、「これ以上の企ては私が禁ずる」（ulterius temptare ueto 806）というように、「最後」を強調しながら、画策の打ち切りを求める。対するユーノーも「不本意」（inuita 809）ではあっても戦場を去る意志を表明し（et Turnum et terras reliqui 809, nunc cedo pugnasque exosa relinquo 818）、ラティウムの言葉としきたりを存続させ、トロイア再興を成就させないという条件が認められると（819–28, 833–840）、「喜んで気持ちをあらためた」（mentem laetata retorsit 841）と語られる。

このことからはまず、ユーノーの怒りと悲憤が作品の大枠を形作っていることが見て取

れる。しかし、その一方で、すべてがここに解消するのではないことも序歌の提示から推測される。序歌には、怒りと悲憤の原因として第一に女神の愛でるカルターゴーがトロイアの後裔によって覆されることが挙げられていた（1.12–22）。それは上に見たディードーの呪詛に連なるものである。この点で、女神の怒りと悲憤は、「トロイア人が埋没する」（subsident Teucri 12.836）というユッピテルの約束によって、この場ではいったん鉾を収めたものの、なお作品の枠を越えてくすぶり続けることが暗示されていると理解してよいと思われる[*12]。実際、それはここでユッピテルが「そなたはユッピテルの妹であり、サートゥルヌスのもう一人の子、憤怒の大波もなんと激しく胸の底にうねるものか」（es germana Iouis Saturnique altera proles, / irarum tantos uoluis sub pectore fluctus 12.830f.）と驚嘆するほど激しく大きく、それゆえに、ローマ建国について「かくも大きな苦難の業」（tantae molis 1.32）という序歌の提示がなされると考えられる。

加えて、作品の枠を越えて続く悲憤という点では、トゥルヌスの姉妹ユートゥルナの悲嘆にそれが明瞭に示されることに注意しておきたい。アエネーアースとトゥルヌスの一騎打ちに決着をつけるべくユッピテルが遣わしたディーラの姿を認めて、もはや万策尽きたことを悟ったユートゥルナは次のように嘆く。

> ‘nec fallunt iussa superba
> magnanimi Iouis. haec pro uirginitate reponit?
> quo uitam dedit aeternam? cur mortis adempta est
> condicio? possem tantos finire dolores
> nunc certe, et misero fratri comes ire per umbras!’ (12.877–81)
> 「天上からの命令にも気づいている。ユッピテルの大いなる御心によるのだ。これが純潔を捧げた見返りなのか。何のために永遠の命を下さったのか。なぜ奪い取ったのか、死の掟を。さもなくば、これほどの悲憤を終わらせることもできように。せめていま、哀れな兄弟のため冥途の道連れとなれように。」

ニーススとエウリュアルスに向かって、彼らの記憶をローマの続くかぎり伝えると詩人が呼びかけたのは、詩の語り自体が葬礼を施すようだと上に述べた。それとは対をなすようにユートゥルナはいつまでも悲憤を抱き続けることによってトゥルヌスの記憶を永遠に留め、それをもって葬礼を果すかのようにも見える。

[*12] Cf. Feeney (1990).

4 「葬礼」の検討結果と結末場面

これまで「葬礼」のモチーフが、基本的通念の枠を越えて、「永遠の記憶」「怒りと悲憤」「復讐」といった関連要素を通じて作品の根幹に関わる表現に与っていることを見てきた。この検討結果を踏まえて、以下には結末場面での「葬礼」について述べる。

まず気づかれるのは、アエネーアースによる「止め」にパッラースへの「葬礼」という側面を見て取れることである。トゥルヌスの嘆願を聞き、いったんは柄にかけた手を止めながら、アエネーアースはパッラースの剣帯が「非情な悲憤を想い起こさせる戦利品」(saeui monimenta doloris exuiasque 12.945) として目に入るや、

> furiis accensus et ira
> terribilis: 'tune hinc spoliis indute meorum
> eripiare mihi? Pallas te hoc uulnere, Pallas
> immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit.'
> 燃え上がった狂気と怒りは恐るべきものとなった。「わが仲間から奪った武具を身に着けたおまえを助けてやると思うのか。これはパッラースの一撃だ。パッラースがおまえを生け贄とし、罪に汚れた血により報いを果たすのだ。」

という言葉とともにトゥルヌスの胸に剣を埋める。それはパッラースを奪われた怒りと悲憤が振るわせた復讐の剣と読める。悲憤に発する復讐が死者に捧げる栄誉として「葬礼」に与ることはディアーナとオーピスがカミッラの仇討ちを果たし、弔いを行なった例に見た。また、上に見たように、トゥルヌスを倒すことをエウアンドロスはアエネーアースに託し、その成就の知らせを息子への冥途のみやげとする、というように語っていた。これらのことは「止め」とそれがもたらすトゥルヌスの死にパッラースへの「葬礼」という意味合いを示唆するように思われ、そうだとすれば、作品は「葬礼」の場面をもって終わっているとも考えられるかもしれない。

では、そのような結末において「葬礼」に言及するトゥルヌスの嘆願はどのように理解すべきか、本論の出発点とした問題へ進むことにする。

トゥルヌスの嘆願が求めるところは、言葉どおりに取れば、助命もしくは死後の遺体返還であった。「止め」によって助命が否定されたことは自明である一方、作品がトゥルヌスの死をもって終わるために遺体返還まで拒絶されたかどうかは分からない。けれども、上に見たように、ディードーやカミッラに関する場合には、悲憤に発する復讐が葬礼の拒絶という形で現れた。

ここでカミッラの死とトゥルヌスの死に共通する要素を確認することが有益であるように思われる。もっとも顕著な共通要素は

> uitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras.
> 命は一つ呻いてから無念を抱いて冥界の底へ去った。

というまったく同じ詩行（11.831, 12.952）が両者の死の叙述に用いられていることである。Kepple はそこから出発して、アッルンスによるカミッラ殺害とアエネーアースによるトゥルヌスへの止めのあいだのパラレルを細かに指摘した*13。このパラレルがトゥルヌスを倒したあとのアエネーアースにすぐに訪れる死を暗示するとした結論の当否には立ち入らないが、カミッラの死とトゥルヌスの死のあいだの対応関係については説得的な議論を行なったように思われる。そのうえで、「葬礼」という観点からも Kepple が触れていないさらに重要な対応を指摘することができる。それはカミッラのために女神ディアーナと実行役でカミッラとは姉妹同然であるニンフのオーピスが仇討ちを果したように、トゥルヌスにも女神ユーノーとトゥルヌスの姉妹であり、女神の手先として働くニンフのユートゥルナが手助けしていたことである。

いま仮にアエネーアースの怒りと悲憤がトゥルヌスの遺体返還まで拒むほど激しいものであったとしてみよう。この仮定はそれほど空疎なものではない。トゥルヌスの嘆願は「これ以上は憎悪に走るな」（ulterius ne tende odiis 938）という言葉で結ばれている。Tarrant はこの言葉がアキレウスの場合を想起させると註釈し、「憎悪」（odia）という語がユーノーの（つまり、決して消えない）怒りと悲憤に通じると解する*14。この理解は妥当と思われる。「怒りと非情な痛憤」（irarum saeuique doloris 1.25）がユーノーの心から消えないように、「止め」は「非情な痛憤を思い起こさせる品」（saeui monimenta doloris 12.945）を見たアエネーアースが「恐るべき狂気と怒りに燃え上がった」（furiis accensus et ira terribilis 12.946f.）結果であったからである。

遺体返還が拒絶されれば、葬礼を施すことはできない。兄弟の死に加えて、この屈辱をユートゥルナは永遠に耐え忍べるだろうか。ユーノーはたしかにトゥルヌスをほとんど見捨てるようにして戦場を去った（et Turnum et terras reliqui 12.809, pugnas relinquo 818）。しかし、それには「もとからラティウムに住む民が古来の名前を変えることも、トロイアの民となってテウクリア人と呼ばれることも、勇士らが言葉を変えて衣服をあらためることもない」（12.823–25; cf. 834–837）という条件がついていた。トゥルヌスの死はこの条

*13 Kepple はアエネーアースとアッルンスに共通して用いられるいくつかの語彙、および、カミッラとトゥルヌスについてともに総指揮権を握ったあと戦利品が原因をなして命を落とす展開を指摘する。

*14 Tarrant, 335f.; cf. Grummond.

件と引き換えの犠牲であり、それに見合う敬意と礼儀が払われて当然であろうと考えられる。パリヌールスら放浪の苦難を終わらせるための犠牲となった人々のためにはその名前が地名に刻まれ、ニーススとエウリュアルスのためには詩人の声が記憶を残した。この点で、ラティウムの民が名前を変えないという条件がトゥルヌスの名前を消し去らないことを含意したとしても不思議はない。そこで、もしユーノーが戦場を去った条件がトゥルヌスに対する敬意と記憶を含むとすれば、トゥルヌスへの葬礼の拒絶はこの条件に背くことになる。

条件が破られた場合、カミッラのためにディアーナがなしたと同様の報復をユーノーが果そうとするであろうことはそれほど想像に難くない。第 1 歌冒頭で女神は、女神パッラースが小アイアースに神罰を下したのに、なぜ自分はアエネーアースを滅ぼせないのか、と嘆き（1.39–49）、それから風神アエオルスにトロイアの艦隊を海の藻屑とするよう命じた。そこから類推すれば、ここでも、ディアーナに倣ってアエネーアースに対する報復をユートゥルナに命じることは十分に予想できる。その結果が仲間から忘られて砂塵の上に置き去りにされたアッルンスと同様であったとすれば、アエネーアースが「砂地の上に埋葬もされませぬよう」（4.620）と祈願したディードーの呪詛が現実性を帯びてくる。呪詛のうち、ローマに対するカルターゴーの敵対とハンニバルの出現は歴史上の事実となることも思い合わせるべきかもしれない。

ただしかし、これはあくまでトゥルヌスへの葬礼が拒絶されたと仮定した場合に推論される展開である。『イーリアス』では、アキレウスがヘクトールを倒したとき、彼の遺体を犬や鳥に食わせるとはっきり断言した（Hom. *Il.* 22.336f., 354）けれども、結局、遺体はプリアモスに返された。アエネーアースの怒りと悲憤が「止め」のときにいかに激しくとも、トゥルヌスの遺体を父ダウヌスのもとへ送り返すことも十分にありえる。問題は、それが語られていない以上、トゥルヌスへの葬礼がなされたか否かではないように思われる。むしろ、それまでの展開に照らして結末場面においても「葬礼」に重要な意義が与えられ、トゥルヌスへの葬礼拒絶が作品の枠を越えて想定される「ローマ建国」事業の未来に深刻な影を落とすかのような暗示が見られるにもかかわらず、そのすべてを明瞭に語らないまま「止め」をもって終わる結末場面の曖昧性の意味を問題とすべきであろう。その点を次に述べる。

5 結末場面の曖昧性

曖昧性という点では、本論が考察の出発点とした「私を、あるいは、そうしたいなら、命の光を奪い取ったあとの体だけでもよい、わが一族に返してくれ」というトゥルヌスの

嘆願も、言い回しそのものが曖昧であったことから問題が生じている。結末場面には他にも曖昧な表現が多く見られる。

上にも「葬礼」の観点から見たように、仇討ちとしての「止め」はパッラースの犠牲に報い、エウアンドロスへの義務を果たす点で英雄にとってほとんど必然の行為とも理解される。その一方で、「おまえの勝ちだ。敗者の掌を差し伸べる私をアウソニア人らも見届けた。ラーウィーニアはおまえの妻だ」(uicisti et uictum tendere palmas / Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx 12.936f.) と明瞭に敗北を認めて嘆願する相手を殺すのは「忘れるな、……従う者には寛容を示して、傲慢な者とは最後まで戦い抜くことを」(memento / ... parcere subiectis et debellare superbos 6.851, 853) というアンキーセースの忠告に反するように見える。二つのうち、アエネーアースは躊躇ののちに前者を選択した。英雄にはアウグストゥスの姿が重ね合わせられていると考えられることから、この選択の当否について学者の議論が分かれることとなった。詩人は批判的な意図を込めているのかどうか、解釈が難しい[*15]。

論者がこれまでに発表した考察も[*16] トゥルヌスの死をめぐる曖昧性にいくつかの点で着目した。

その一つはトゥルヌスの嘆願の本意はそもそも助命にあるのかという疑問に発する。ユーノーが戦争を起こした狙いは、アエネーアースが勝つことは動かせないので、戦争を長引かせ、それによってトロイアとイタリア双方にできるかぎり多大な犠牲を強いることにあった (7.314–316)。しかし、アエネーアースとトゥルヌスが戦えば結果は明らかで、戦争はそこで終わってしまうため、女神はユートゥルナも使ってトゥルヌスの延命工作を講じた。けれども、ユーノーの意図と裏腹にトゥルヌスが欲したのは命よりも武勇の誉れであった。そこで、本望が遂げられようというときに延命を願うのは不自然にも見える。実際、嘆願の言い回しは曖昧であり、助命と遺体返還が字義どおりに二つに一つの選択として示されているなら、遺体返還が本意であった可能性は助命についてと同じだけあることになる。

いま一つはトゥルヌスを射貫いたアエネーアースの槍に関わる。その描写は「必殺の」と読める (telum fatale 919, uolat atri turbinis instar / exitium dirum hasta ferens 923f.)。これが字義どおりなら、槍で腿の中央を貫かれた (926) トゥルヌスは致命傷を負ったはずである。もしそうであった場合、助命嘆願は意味をなさなくなる。トゥルヌスの側から言えば、致命傷の自覚があったとすると、遺体返還に嘆願の本意があったことになる一方、自

---

*15 問題の適切な概観・整理として、cf. Horsfall (1995), 192–216, Tarrant, 16–24. (いわゆる悲観論の代表格だが) 最新の論考として Putnam (2011) がある。

*16 高橋 (2003), (2011).

覚がなかったとすると、助命嘆願が哀れなほど愚かしい行為であったことになる。アエネーアースの側から言えば、「止め」が不要であったことになり、そこに示された激しい怒りと悲憤も無意味であったことになる。けれども、「止め」が決定打となったために結果として槍の傷が致命的であったかどうかは大きな意味がないように見える。つまり、槍は単に「止め」を用意する意味で「必殺」と解することができ、これがおそらく一般的な理解である*17。しかし、致命傷か否かがトゥルヌスの嘆願の本意と「止め」の必要性に関わるとすれば、場面全体に対して重要な意味を有することは間違いないように思われる。

さて、これらの曖昧性の原因をなすとともに、それ自体がこの場面でもっとも曖昧と思われるのは、トゥルヌスの絶命をもって作品が終わることである。唐突な終わり方を前に誰もがこれが本当に作品の結末なのかと疑問に思い、そこから、古代から現代までさまざまな『アエネーイス』後日譚が創作されてもきた*18。それがただ唐突であるだけなら作品そのものが未完という見方もできるが、この結末が詩人が意図して用意したものであることはほぼ間違いない。内容的には、第 1 歌冒頭と対応しつつ「終わり」を意識した表現が見て取れる一方、分量的にも、後半では各歌の行数があとになるほど多く、第 12 歌がもっとも長いので、なおまとまった叙述が続くことは考えにくい。

では、このように作品を結んだ詩人の意図はどのようなものと考えるべきか。もちろん、答えは容易に出てこない。が、一つ言えるのは第 12 歌の始まりにトゥルヌスの名前が置かれ、その命が尽きたところで歌が終わっていることになにか意味が見出せるのではないかということである。

第 12 歌の叙述は、

> Turnus ut infractos aduerso Marte Latinos
> defecisse uidet,　(12.1 f.)
> トゥルヌスは、軍神の風向きが変わり、ラティウム軍が打ち破られ、勢いを失ったのを見ると、

*17 Tarrant, 328. それに対して岡, 266f. は「二人の英雄が運命の指図を受けることなく自由に行動していることを暗示する」と解釈した。不動であるはずの運命の道筋から外れることがありうるかのような表現がなされているとすれば、これほど曖昧なことはない。

*18 オウィディウスによるアルデアの灰燼から生まれた鳥とアエネーアースの神格化（*Met.* 14.572–608）およびディードーの妹アンナとの再会（*Fasti* 3.545–656）と、上に触れた（n. 8）Maffeo Vegio『第 13 歌』がよく知られる。これらには『アエネーイス』解釈に資する面がほとんど見出せない一方、Le Guin による最近の小説 *Lavinia* には作品の根幹に迫る面（とくに、O'Hara, 106 も紹介するように、「止め」をアエネーアースが殺害であったと考えるのに対してラーウィーニアは必然のことと見なすという複眼的な視点、あるいは、詩人ウェルギリウス自身も作品世界のすべてを承知していないというような提示など）がある。

というように、トゥルヌスが自軍の苦境を自身の目に捉えたことを示して始まる。これと同様の叙述ないし登場人物の言及は第 12 歌を通じて繰り返される。ラティーヌス王はトゥルヌスにアエネーアースとの一騎打ちを思いとどまらせようとする言葉の中で、

> 'qui me casus, quae, Turne, sequantur
> bella, uides, quantos primus patiare labores.' (12.32–33)
> 「トゥルヌスよ、そなたは見ている、私をどのような不幸が、どのような戦争が追い回しているか、どれほど大きな苦難をまずもってそなたが耐えているかを。」

と言う。神薬によって矢傷の癒えたアエネーアースが味方の総勢とともに戦場に復帰したときには、

> uidit ab aduerso uenientis aggere Turnus,
> uidere Ausonii, gelidusque per ima cucurrit
> ossa tremor (12.446–448)
> 向かってくる敵をトゥルヌスは正面の土塁から見た。アウソニア兵らも見た。と、凍るような戦慄が骨の髄を走り抜けた。

と叙述される。トロイア軍が城市に迫ったとき、王宮防衛は他の者にもできると言って、なおもアエネーアースとの一騎打ちを回避させようとするユートゥルナに向かってトゥルヌスは、

> 'nam quid ago? aut quae iam spondet Fortuna salutem?
> uidi oculos ante ipse meos me uoce uocantem
> Murranum, quo non superat mihi carior alter,
> oppetere ingentem atque ingenti uulnere uictum.' (12.637–640)
> 「どうしろというのだ。いま命の保証を与える幸運の女神がどこにいるのだ。私はこの目の前に見たのだ、私を呼ぶ声を上げながら、ムッラーヌスが——私が彼にまさって大事に思う者は他にない——命を落とすのを。巨体に大きな傷を受けて屈したのだ。」

と語る。ディーラに力を奪われ、孤立無援で進退窮まったトゥルヌスについては、

> tum pectore sensus
> uertuntur uarii; Rutulos aspectat et urbem
> cunctaturque metu letumque instare tremescit,

nec quo se eripiat, nec qua ui tendat in hostem,
nec currus usquam uidet aurigamue sororem. (12.914–918)
このとき、胸中にさまざまな思いがめぐり来る。彼はルトゥリー人と都に目をやり、恐怖にたじろぐ。迫り来る死に怯え、どこへ難を逃れるか、何を力に敵に向かうか分からず、戦車も、御者を務める妹も、どこにも見つからない。

という描写がなされる。

その一方、死については、目が闇で覆われる、あるいは、光を奪われるという類いの表現が第 12 歌を通じて繰り返される。アマータはトゥルヌスが命を落とせば自分もこの世にはいない決意を語って、

'simul haec inuisa relinquam
lumina nec generum Aenean captiua uidebo.' (12.62f.)
「ともに私も捨て去るであろう、このいまいましい命の光を。囚われの身となってアエネーアースの婿姿を目にしはしない。」

と訴える。一騎打ちのための祭儀の場がユートゥルナの策略によって一転して修羅場と化したとき、最初に倒れた者たちの叙述を締めくくる形でポダリーリウスの死は、

olli dura quies oculos et ferreus urget
somnus, in aeternam conduntur lumina noctem. (12.309f.)
彼の両眼に過酷な安らぎと鋼の眠りがのしかかる。瞳の光が永遠の夜に閉ざされた。

と描写される。サケースによるトゥルヌスへのアマータ自害の知らせは

'regina, tui fidissima, dextra
occidit ipsa sua lucemque exterrita fugit.' (12.659f.)
「あなたをもっとも信頼した女王が御自身の手で果てられた。驚愕のあまり、命の光から逃れたのだ。」

と語られる。そして、トゥルヌスは嘆願の中で自身の死を「命の光を奪い取られたあとの体」(corpus spoliatum lumine 12.935) と言っていた。

このように、一方で第 12 歌に描かれるラティウム勢の苦境がトゥルヌスの目に映る光景として表現され、他方で死が命の光を奪うと表現されることを考え合わせるとき、結末場面は死がトゥルヌスの目を闇で閉ざすと同時に終わっていることに気づく。作品末尾の

詩行も、uitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras（12.952）というように、命（uita）が影（umbras）の下へ去ったことを語って結ばれている。それまでトゥルヌスの目に映るものとして描かれていたこの世界が彼の死とともに何も見ることのできない暗闇に覆われたかのような終わり方に思われるのである。

この理解が正しいとすれば、結末場面は死の冷徹な絶対性を表現しようとしていると言えるかもしれない。死は誰にも訪れる。死後もこの世界は続くが、死を迎えた者はその先の時間に存在する世界に決して関与できない。この絶対則は作品の主題である「ローマ建国」と深く関わっている。第 1 歌でユッピテルはローマ人に対して「支配の境界も期限も定め置かぬ。限りのない統治を与えた」（nec metas nec tempora pono: / imperium sine fine dedi 1.278f.）と約束した。ローマが永遠に存続する一方で、個人の生に限りがあれば、「ローマ建国」が達成されるためには建国事業を引き継ぐ人間が途絶えることなく輩出され続けなければならない。実際、そのようにしてローマがアウグストゥスの治世まで、幾多の苦難と危機に直面しながらその都度克服し、発展してきたことは第 6 歌のいわゆる英雄のカタログにも示されている*19。しかし、アウグストゥスにもいつかは必ず死が訪れる。それはアエネーアースも同じである。そのあとは偉大な指導者もすべてをあとに残る者に託すしかない。託された者がピエタースに優れる英雄なら、自分の遺志を継いでくれるはずであるが、そのように事が運ぶか見届けるすべはない。こうして死の絶対性はローマの永遠性に危機をもたらし、未来を不透明にする。

ここに結末場面の曖昧性と共鳴する要素を見ることができるかもしれない。つまり、結末場面の暗示によってトゥルヌスへの葬礼拒絶から予想されるローマの未来への深刻な影は、死の必然性との対比においてその先の未来につねに想定される不確定性とよく重なり合うように思われるのである。

そのうえで注意したいのは、葬礼がそうした不確定性の克服に向けて重要な意義を担うように考えられることである。というのも、そこには先人の遺志をあとに残る者が尊び、発展させるべき事業を継承するという意志表明が込められると理解されるからである。上に見たように、葬礼が永遠の記憶を伝えると表現されたこともこの点に合致する。その一方、葬礼が拒絶されることは遺志継承の途絶に通じるであろう。この点で、アエネーアースの遺体が埋葬もされぬように、と願ったディードーの呪詛は単に英雄個人のみならず、ローマ建国の道程全体に及ぶものとも考えられる。実際、女王はカルターゴーの民にローマとの永遠の敵対を託している。

*19 この歴史観にもとづいてキケローは『国家について』第 2 巻（とくに、2, 37, 45 章参照）でローマ史を概観し、それはリーウィウスに受け継がれた (cf. Miles, 88ff.).

その点で、本論の最初にも述べたように、結末場面でもトゥルヌスの死を見届けるルトゥリー人（12.928）、アウソニア人（937）の姿が描かれていることに注意すべきであると思われる。彼らはトゥルヌスが自分たちのために戦ったと承知している。

> ‘ille quidem ad superos, quorum se deuouet aris,
> succedet fama uiuusque per ora feretur;
> nos patria amissa dominis parere superbis
> cogemur, qui nunc lenti consedimus aruis.’ (12.234–237)
> 「あの勇士は祭壇に一身を捧げている。必ずや、神々のもとへも達する誉れを得るであろう。人々に語り継がれて生き続けよう。だが、われわれは祖国を失い、横暴な君主に従うことを強いられるだろう。それなのにいま、じっと野に座り込んでいるのだ。」

というユートゥルナの唆しにのって一度は一騎打ちの盟約を覆したのもそのためである。そこで、もしあとに託そうとする遺志がトゥルヌスにあり、それを尊ぶ者があるとすれば、それはこのルトゥリー人らであると考えられる。もちろん、トゥルヌスにはアエネーアースが背負うような使命はなかった。ただ、類する響きをトゥルヌスの嘆願を締めくくる「これ以上は憎悪に走るな」（ulterius ne tende odiis 12.938）という言葉に聞き取ることはそれほど的外れとは思われない。一騎打ちの誓約においてアエネーアースは、自分に勝利が与えられた場合には、

> paribus se legibus ambae
> inuictae gentes aeterna in foedera mittant. (12.190f.)
> 対等の条件で、双方の民が不敗のまま永久不変の盟約を結ぶこととしよう。

と宣言し[*20]、騒乱の中で英雄が無差別殺戮（saeuam nullo discrimine caedem 12.498）に走ったときに詩人は

> tanton placuit concurrere motu,
> Iuppiter, aeterna gentis in pace futuras? (12.503f.)
> かくも激しく衝突させるのがよいと思われたのか、ユッピテルよ、これらの民はや

[*20] アエネーアースは「勝利がトゥルヌスに渡ったなら、敗者は退去するものと定める」（cesserit si uictoria Turno, conuenit uictos discedere 183f.）とも誓っている。つまり、この誓約では、トロイア側の敗北は想定しても、イタリアの民には敗北の想定が除外されている。ここには戦後の統合が意識されていると考えられる。

がて永遠の平和を保つ定めであるのに。

と嘆いた。戦いを終えた双方は勝敗の区別なく統合するというのが運命の定めであり、これに「憎悪に走るな」というトゥルヌスの言葉は合致する[*21]。それは直接にはアエネーアースに向けられているけれども、ルトゥリー人らがそこに指導者から自分たちへの遺志表明があると理解すれば、彼らはその遺志を尊び、戦後の統合に協力的になることが予想される。しかし、アエネーアースの「止め」によってトゥルヌスの命は「無念を抱いて」(indignata 12.952) 散った。「憎悪に走るな」はもはやトゥルヌスの遺志ではないと考えられるかもしれない。そのうえ、アエネーアースが遺体返還まで拒絶するとなれば深刻で困難な状況が生じることが容易に想像される。ただ、トゥルヌスの命が闇に閉ざされたとき、そのように、その先の未来は誰もはっきりとは見通せない。そうした不確定性の表現に「葬礼」は与っているように思われる。

(京都大学)

参照文献

Austin, R. G., *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber QuartusPrimus.* Oxford 1963.

Castro, E., Interaction and Episodic Coherence in Book 5 of the *Aeneid. Hermes* 138 (2010), 92–108.

Connington, J. and H. Nettleship, *The Works of Virgil.* Vols. 2–3. Hildesheim 1963 (London 18844).

Duckworth, G. E., In Hardie (1999), Vol. IV, 304–321 (Orig. *AJP* 88 (1967), 129–150).

Feeney (1990): D. C. Feeney, The Reconciliations of Juno. In Harrison, 339–62 (= Hardie (1999), Vol. III, 183–203 (Orig. *CQ* 34 (1984), 179–94).

Grummond, W. W. de, *Saevus dolor.* The opening and the closing of the *Aeneid. Vergilius* 27 (1981), 48–52.

Hardie, P.(ed.), *Virgil. Critical Assessments of Classical Authors.* 4 vols. London and New York.

Horsfall, N.(ed.), *A Companion to the Study of Virgil.* Leiden 1995.

Heyne, G. Chr., P. Vergili Maronis opera. Hildesheim 1968 (Leipzig 1833).

Kepple, L. R., Arruns and the Death of Aeneas. *AJP* 97 (1976), 344–360.

Miles, G. B., *Livy: Reconstructing Early Rome.* Ithaka/London 1995.

[*21] 大芝, 69 参照。

Mitchell-Boyask, R. N., Sine fine: Vergil's Masterplot. *AJP* 117 (1996), 289–307.

Nishimura-Jensen, J., review: Stratis Kyriakidis, *Narrative Structure and Poetics in the* Aeneid. *The Frame of Book 6.* Bari 1998. Vergilius 46 (2000), 175–80.

O'Hara, J. J., The Unfinished Aeneid? In Farell, J. and M. J. C. Putnam (ed.), A Companion to Vergil's Aeneid and its Tradition. Chichester/Malden, MA 2010, 96–106.

Putnam, M. C. J., *The Humanness of Heroes. Studies in the Conclusion of Virgil's Aeneid.* Amsterdam 2011.

Tarrant, R., *Virgil Aeneid Book XII.* Cambridge 2012.

大芝芳弘、「『アエネーイス』のトゥルヌス像」『地中海学研究』12 (1989), 49–76.

岡道男、『ギリシア悲劇とラテン文学』岩波書店 1995.

高橋宏幸（2003),「ウェルギリウス『アエネイス』における「非情」」『西洋古典学研究』51, 94–106.

同（2011),「『アエネーイス』結末場面における「好機」」『フィロロギカ』6, 13–33.

研究ノート

『イーリアス』におけるトロイア方援軍の言葉
——小アジア沿岸の旅から——

細井敦子

『イーリアス』第 2 巻の末尾には、アカイア勢の船のカタログにつづいてトロイア方のリストがあり（2.816–877）、そこにはかれらの出身地として、トロイアを先頭に、その西北はトラキア、北東は黒海沿岸、南東は地中海沿岸まで、古代アナトリアの 16 ほどの地方があげられている[*1]。2011 年秋に、これらの地方のうちエーゲ海と地中海に沿う小アジア地方を、トロイアからシデ（Side）まで訪ねる機会を得て、リュキア語、カリア語、シデ語などの碑文をいくつか実見することができた。ここではとくに、『イーリアス』の重要人物の一人であるサルペードーンの領地リュキアに残る紀元前 5–4 世紀の碑文を中心に、アナトリア諸語については初心者という立場から調べたことを報告して、ホメーロスが「トロイア方援軍」に関わる言葉の状況を（歴史事実としてどうであったかというよりも）どのようなものとして提示しているかを考える手がかりとしたい[*2]。

1.1　「印欧アナトリア語派」のなかのリュキア語

アナトリア語とは、前二千年代からヘレニズム期までの、アナトリア地方（エーゲ海および地中海沿岸からユーフラテス河辺りまでの、ほぼ現在のトルコ共和国にあたる広い地域）に存在した諸言語の総称であって、印欧語系と非印欧語系の両方をふくむ。印欧語系諸語は「印欧アナトリア語派」と「印欧バルカン語派」に分けられる。前者のなかでもっとも古い文字史料（楔形文字）を大量に残しているのは、前 14–13 世紀を最盛期としたヒッタイト語（Hittite）で、1915 年から 1917 年にかけてのフロズニー（B. Hrozný）による解読で名詞と動詞の形態法など文法構造から印欧語であることが判明し、文法体系の再構成も進んで、他のアナトリア諸語の解明に貢献している。語彙の点では、「印欧アナト

---

*1 *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*［以下 *Oxf. Hbk* と略記］Chap. 2, 15–33）は、ホメーロスおよびヘーロドトスにみえるアナトリア関係の記述を明快にまとめて、参照文献リストとともに提示している（G. Mcmahon 執筆）。

*2 なお印欧アナトリア語派全般についての記述は、本稿末にあげた諸文献をもとにした概略である。

リア語派」は他の印欧諸語との共通点がほとんどなく、印欧語系のなかでも特異な位置をしめており、この特異性は、最も基本的な語彙である親族名称において顕著であるとされる。「印欧バルカン語派」は前 1200 年頃におそらくバルカン半島から入って、かつてのヒッタイト領を占拠した人々の言語と考えられ、アナトリアの古い印欧語である前記「印欧アナトリア語派」とは性格を異にしている。本稿筆者の実見した碑文の言語であるリュキア語（Lycian）、カリア語（Carian）、シデ語（Sidetic）などは、楔形文字のヒッタイト語やパラー語（Palaic）、楔形文字ルウィー語（cuneiform Luwian）*3 などよりも新しく、前 8 世紀頃から小アジア西南部に広がったもの。フェニキア・ギリシア文字系の言語史料が残されているが、量的にも、また史料が属している期間の長さの点でもヒッタイト史料には遠く及ばない*4。

今回調べたリュキア語については、リュキアという地方のことは "Lukka" の形でヒッタイト文書にも記録されているので、その頃にはこの地方に人が住んでいたことは確かであると考えられるが*5、現存のリュキア語文字史料は古くても前 7–6 世紀頃、それもごく僅かな痕跡にしか遡ることができず、大半は、キュロス大王の臣下であったハルパゴスがリュキアの町クサントスを占領した前 540 年頃からアレクサンドロス大王の到来までの期間のものである。その後は、330 年以降リュキア語の文字史料は著しく減少し、けっきょくギリシア語に取って代わられた。リュキア語そのものが、中世写本へと伝承される文献史料を残すことなく、消滅したのである。したがって、リュキア語の史料は、大小の石碑に刻まれ、あるいは壷に記された文字の形でしか残っていないわけで、その期間も二百年足らずという短いものである。これらの史料をなんらかの形で『イーリアス』の理解に役立てようとするとき、残された文字史料と、ホメーロスが提示するトロイア方援軍の兵士たち——その大半は文字を残さなかった人々であると考えられる——が話していたであろう言葉との間には、当然のことながら大きな隔たりが存在しうることも忘れてはならないであろう。1 例をあげれば、これまでの史料から再構成されるリュキア語文法の動詞活用には 2 人称が欠けているが、リュキア語の話し手たちが 2 人称を使わなかったとは考えられない、ということがある。このような制約はあるが、19 世紀以来の考古学・言語学研究の蓄積は、この言語の文法構造の骨格と文字の音価の大要とを明らかにしており、語彙についても近年の発掘の成果をふまえて解明が進んでいる。こうした状況は、程度の差は

*3 聖刻文字ルウィー語（hieroglyphic Luwian）のほうはより新しく、リュキア語とのつながりがとくに強いとされる。

*4 たとえばシデ語では、刻まれた記号は 28 個、そのうち音価を確定できるのは 15 にすぎない（Brixhe 1969）。1970 年代に、前 3–2 世紀の碑文をふくむ 6 点の小碑文が発見された。リュキア語については後述する。

*5 *Oxf. Hbk*, 26, 605–608.

あれ、カリア語、リュディア語など他のアナトリア語派の諸言語についてもいいうることで、私たちは「トロイア方援軍の言葉」が、耳で聞くだけでもあきらかにギリシア語とは異なる響きをもつ言葉であったこと、互いの間でもそれぞれが異なる響きをもつ言語集団を形成していたことを推定できる。

1.2　現存するリュキア語史料

リュキア語の銘文（インスクリプション）史料は、コインの刻銘を除いて、基本となる二つの史料集成すなわち Ernest Kalinka の『小アジア碑文集成』第 1 巻（siglum: TL）およびその後出土した史料の Günter Neumann による集成（siglum: N）の 2 書に集められている*6。リュキア地方から出土した史料は 200 点を少し超える点数であり*7、古くても前 6 世紀後半から前 4 世紀後半までのもので、そのうちリュキア語のみのものが 172 点、リュキア語とギリシア語との 2 言語併用が 20 点、アラム語（アケメネス朝ペルシアの公用語）、リュキア語、ギリシア語の 3 言語併用が 1 点、他にアラム語のみのものなどが数点である。これらの内容は、8 割以上が墓誌で、それ以外は公式文書と、統治者を讃える事蹟顕彰碑である。顕彰文は墓誌をも兼ねていて、主体はリュキア語でそこにギリシア語の韻文が挿入されている例がいくつかあり、ここではギリシア語が日常語のレベルを超えた「文語 langue littéraire」として使われていたと考えられる*8。ペルシア帝国のサトラップ（太守）が出す行政上の条令などの公式文書ではアラム語が主体であるが、前 4 世紀中頃以降の行政や宗教関係の公文書にはギリシア語の例がでてくる。アケメネス朝ペルシア末期の混乱期に、リュキア地方が西隣のカリアのサトラップである Mausolos の支配下におかれた時期のものでは、かれのヘレニズム推進に伴って、ギリシア語が「行政語」としてリュキア語やアラム語と同等の位置に並んで使われるようになり、そして地方語であるリュキア語は、ペルシア帝国の終焉にともなってギリシア語に、次いでラテン語に、呑み込まれてゆく。

他のアナトリア諸語史料のなかで、ひとつリュキア語碑文に特徴的なことは、語または語群*9 を区切る印としてコロン：が使われていて、「分かち書き」に近い記法がとられていることである。しかし文の区切りは示されていないので、これをきめることが、品詞と

---

*6 Kalinka, E.; *Tituli Asiae Minoris* [=*TAM*], Vol. I. *Tituli Lyciae. Lingua Lycia conscripti*, Wien 1901; Neumann, G.; *Neufunde Lykischer Inschriften seit 1901* (*Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 7), Wien 1979.

*7 トルコでは現在も各地で発掘調査がすすめられているので、これらの数字はおおよその目安である。

*8 Le Roy 1981/83, 222.　顕著な例としての「クサントスの碑文」については後述する。

*9 1 例として、TL27 第 6–7 行では : tideimi : setideimi : と刻まれており、: tideimi : は 1 ブロックの中に 1 語（「子に」の意）であるが、次のブロック : setideimi : は「そして」を意味する小詞 se が次にくる tideimi と共に 1 つの「語群」をなす。Neumann (1983, 138) はコロンで区切られた 1 ブロックを Komplex とよぶ。

語の意味の決定とともに必要となる。Neumann 1983, 138 によれば、コロンで区切られた語・語群（Komplex）には約 1700 の異なる種類があるが、そのうちで意味の確定しているものは、人名地名等固有名詞もふくめてせいぜい 500 ということである。これには、史料の絶対数が少ないことに加えて、その大多数が定型的で多様性に乏しい墓誌であることが大きな原因と考えられよう。

リュキア語史料に使われている文字は、西ギリシア系アルファベット（音価 /kh/ の表記に *Ψ* を使う）を基にしたと考えられる 29 個の記号から成る。ただし「ダイアモンド」と通称される 1 記号 ◊ の音価は未定であり、字訳では q, *τ*, *θ* とされるがギリシア文字との対応は未確定という記号もある。また、大文字の K で字訳される記号（音価は /kw/、/gw/ と推定される）および *χ*（または x または kh）で字訳される記号（音価 /kh/）を、語彙集作成にさいして、ローマ字アルファベットに準じた配列の中でどの位置に置くか、は作成者によって異なっている。以下に代表的な glossary である Neumann 2007 *Glossar des Lykischen* ［略号 *GLyk*］と Melchert 2004 *A Dictionary of the Lycian Language* の序論部分に示された字訳（transliteration）配列を記しておく（リュキア文字およびその推定される文字表については本稿末の印欧アナトリア諸語全般に関わる文献のリュキア語部分を参照されたい）：

Neumann, XIII: a ã b d e ẽ g h *χ* i j k l m m̃ n ñ p q r s t *τ* *θ* u w z ◊ K
Melchert, ix: a ã b d e ẽ g h i j k K l m m̃ n ñ p q r s t *τ* *θ* u w x z ◊

また、ごく粗い言い方になるが、現存資料にみられるリュキア語の母音は a, e, i, u の 4 母音で（o を欠く）、それに鼻母音 ã, ẽ および音節を形成しうる m̃, ñ そして半母音 j, w がある[*10]。

2.1 二つの墓碑

個人の墓碑の例としてはまず、リュキア語とギリシア語併記で両語がほぼ完全に一対一の対応をしていることで有名なものがあげられる[*11]。Limyra 出土の、前 5 世紀と推定される家型墳墓の墓誌（TL117）で、1–5 行がリュキア語、5–8 行がギリシア語。「Parmna / *Παρμένων* の子 Siderija / *Σιδάριος* が、彼自身と妻と息子 Pubiele / *Πυβιάλης* とのためにこれを建てた」という内容で、ギリシア人 *Σ.* が、リュキア女性と結婚し、生まれた息子にはリュキア名をつけた、すなわち土地の共同体に根を下ろしたことを意味すると考えられている。

---

*10 Neumann *GLyk* では "m m n ñ" となっているが、2 番目の m はあきらかに m̃ の誤植である。
*11 TL117 は本稿筆者未見。人名表記は Kalinka 1901 および Neumann *GLyk* の当該項目による。

第二の例はイスタンブールの考古学博物館で実見したもの（TL27）で、Düwer 出土、ヘレニズム期と推定されている。リュキア語のみが記されており、「Meχisttẽnẽ（Sχχulije の子）が、自身と妻 Merimawa（Petẽnẽni- の子）および息子 Sχχulije のためにこれを建てた」（全 8 行）という内容である。四つの異なる人名（うち祖父と孫息子とは同名）があるが、Meχ- は *Μεγασθήνης*[*12], Sχχ- は *Σκόλιος* なるギリシア名のリュキア語表記であり、妻 Mer- とその親 Pet- の名はリュキア名であると解されている[*13]。ここで興味深いのは tideimi（子）なる語の適用範囲の問題で、この語は先述の TL117 では並記されたギリシア語 *υἱός* に対応していることから「息子」と解されたわけであるが、こちらの TL27 では「妻」の出自を記しているので、tideimi が指すのは「娘」のはずである。訳語としては Melchert は "son, child"、Neumann は "Kind, *ἔγγονος*" としていて[*14]、「娘」を指す可能性についての特別の言及はない。この語 tideimi の語源（**dhei-*「乳を飲ませる」）については、Neumann の当該項目及び Laroche 1979, 110 に詳しい。また、「Petẽnẽni- の子 Merimawa」にある Petẽnẽni- なる人名は、Neumann の *GLyk* によれば男性である[*15] が、そうであれば、名乗る時に父（方）の名でなく母（方）の名を名乗るのはリュキア人特有の慣習である、というヘーロドトスの記述（1.173.5）はここには当てはまらないことになる。

2.2 クサントスの統治者（デュナステース）顕彰碑文（TL44）とレートー神殿跡出土の 3 言語併用の決議碑文（N320）

この二つは現存するリュキア語碑文のなかでとくに有名なもので、今回の旅では両方とも実見することができた。前者は現存のリュキア語碑文としてはテキストが最も長く、後者はほぼ完全な形で残る 3 言語併用碑文である。二つは内容面でも研究史の点でも対照的なので、以下にその概略を並記する：

	Le pilier inscrit de Xanthos (TL 44)	**La stèle trilingue du Létôon (N320)**
現所在：	出土地クサントス遺跡、Roman Agora の	Xanthos の南西 4km、Létôon（Leto,

[*12] Neumann *GLyk* は meχistte ne と分離して読む説をとり、*Μέγιστος, Μεγίστης, Μήκιστος* の可能性も引いている.

[*13] Melchert 2004.

[*14] Neumann *GLyk* で tideimi の項目を調べて下さった京都大学大学院の斎藤有哉さんと、のちに同書の閲覧を可能にして下さった同大学院図書館にお礼申し上げる。

[*15] おそらく nẽni「兄弟」を第二要素とする合成名であろうという。Melchert 2004 は性別を記していない（なおリュキア語では、名詞の性については有性／有生か無性／無生かの区別のみがあって男女性の区別はない）。Hdt. の記述の史料的裏付けの有無や推定されるリュキア社会の形等々の検討は、本稿の扱う範囲を超える問題である。

	北側。碑文上部断片等 1842 年以来 British Museum（Frieze 部分等 İstanbul Archaeol. Museum）。	Apollon Artemis の 3 神殿）東側で出土。出土地の北西 Fethiye（古代の Telmessos）の博物館に展示。
発見時期・発見者：	1838–1843 年 Ch. Fellows.	1973 年 8 月 31 日．フランス考古学調査団（H. Metzger, E. Laroche & alii）。1962 年来の発掘調査のなかで上記年月日に発見。1978 年来 Ch. Le Roy, J. Bousquet & alii.（1970 年代からフランスは調査をレートーオン周辺に限定）。
発掘調査：	1881–1908 年：ウィーン考古学調査団（O. Benndorf, E. Kalinka, Hula & alii）。二度の大戦間の中断などを経て 1950 年からフランス調査団（P. Demargne, P. Devambez, H. Metzger & alii）。2001 年からカナダ調査団[*16]。	
内容からの推定制作年代：	前 5 世紀末。	358 (Artaxerxès III) / 337 BC (Artax. IV)．年代の違いはアラム語文冒頭「Artaxerxes の第 1 年 Sywn の月」の解釈の違いによる。
現存石碑の形とサイズ：	ほぼ四角柱。ca. W170 x D162 x H400（+ 基部 216 + frieze 67）cm．4 面に刻字。	直方体。ca. W57 x D30 x H135cm. 3 面に刻字。
言語と行数*：	a 南面リュキア語 31 字 55 行；b 東面リュキア語 31 字 64 行；c 北面リュキア語 19 行＋ギリシア語 12 行＋ミリア語** 41 字 34 行；d 西面ミリア語 32 字 71 行。	正面アラム語 27 行；左面リュキア語 26 字 41 行；右面ギリシア語 26 字 35 行。
	文字は楷書体・隊列式（*στοιχηδόν*）。	文字は楷書体・隊列式（*στοιχηδόν*）。
	* 行数は上部断片部分（在 Brit. Mus.）も含む。	
	** Milyan：「リュキア語 B」ともよばれる。	
内容：	リュキアの統治者（デュナステース）（*δυνάστης*）Xeriga (Kheriga) / *Γέργις* (Gergis) の顕彰碑：一族（父祖、兄弟、息子 Erbbina / *Ἀρβινας*）の事蹟記述：5 世紀初期からペロポンネソス戦争末期まで（ca.485–405）にわたると推定。	リュキアの太守（サトラップ）（*σατράπης*）Pigesere / *Πιξώδαρος* (Pixodaros) のもとでの新しい祭祀の導入とそれに伴う諸規則を制定するクサントス市民とその近隣民（ペリオイコイ）の決議文。

*16 Baker–Thériault (Schuler 2007, 121–132) による、経緯と 2005 年現在の状況、実施方法についての報告がある。

レートーオンの 3 言語併用石柱（N320）は 1973 年に発見された時、アラム語部分に僅かの欠損はあるものの、ほぼ完全な状態であった。しかも 3 言語併用で、リュキア語文とギリシア語文とはほぼ同じ長さと内容をもち、石柱の正面に刻まれたアラム語文は他の 2 言語文よりも短い。「Kaunos 王と Ἀρκεσιμᾶς」なる 2（英雄）神のための神官の任命と神殿／祭壇建造およびそれに伴う諸規則を記したもので、おそらく左面（リュキア語）右面（ギリシア語）の碑文は土地の住民に向けて示され、正面のアラム語文はペルシア帝国中央政府に概要を報告する文面であろうと考えられている。前 4 世紀後半のリュキアに関する歴史宗教社会面での史料的価値はいうまでもなく、既知の言語であるギリシア語文の併存に助けられて、リュキア語とその文字の解明（音価の確定など）にも寄与するところは大きく、その意味でもこの碑文の発見は画期的なことであった。テキスト原文は発見の翌年に公表され、最終的な形では 1979 年の *Fouilles de Xanthos (FdX)* の第 VI 巻全体がこの碑文の記録にあてられている[*17]。

一方、クサントスの碑（TL44）は、基底部から高さ約 7m くらいの石柱は今もそのまま遺跡に建っているが、上部は発見された時すでに崩落していて、その崩落断片の多くは、碑文はロンドンの大英博物館、碑文の上部にあった浮彫りの装飾部分はイスタンブールの考古学博物館、と分散して現存している[*18]。最初の発見時からはすでにほぼ二百年を経ており、20 世紀初頭の Kalinka 1901 の碑文集成には、当時実見可能であった文字部分すべてが、拓本による復元図およびローマ字表記の字訳テキストとして掲載されている[*19]。しかしその後、部分的な修正や新しい解釈は学会報告や研究論文の形で数多く出されてはいるものの、全体としての新しい校訂版ともいうべきものは、今回調べ得たかぎりでは、まだ出ていないようである。上述したようにとくに語彙の点で意味未確定の hapax（あるいはそれに近い）語が多いこともあるが[*20]、このクサントスの碑では北（c）面の後半部分と西（d）面に「ミリア語 Milyan」（または「リュキア語 B」ともいう）部分があって、他の南（a）面、東（b）面および c 面上部とほぼ同じ文字を用いているが、音価の点で問題を残しており、このことも解明の進展を遅らせる要因のひとつとなっている。

---

*17 H. Metzger, E. Laroche, A. Dupont-Sommer & M. Mayrhofer; *Fouilles de Xanthos (FdX)*, tome VI: *La Stèle Trilingue de Létôon*, Paris 1979; テキストは 29–185. なお、松本 1983, 98–103 に、3 言語テキスト（リュキア語とアラム語は字訳表記）とその邦訳がある。

*18 発掘の歴史と詳しい記録は P. Demargne; *Fouilles de Xanthos (FdX)*, tome I: *Les piliers funéraires*, Paris 1958; その後の調査研究の成果は A. Bourgarel, H. Metzger, J. Bousquet; *FdX*, tome IX, 147–196: Troisième Partie, 1992 参照。

*19 E. Kalinka, *TAM* vol. I（上掲註 6），40–44.

*20 リュキア語語彙解明の方法とその困難については、Neumann 1983 がこの碑文（TL44）の b51–55 の 5 行を例にひいて詳しく説明している。そこで意味未確定とされた 3 語は、同著者 2007 の *GLyk* においても定訳語を与えられていない。

このような難点はあるものの、この建立当時は高さ 10m を超えていたと推定されるクサントスの石碑が前 5 世紀のペロポンネーソス戦争、とくにその末期におけるリュキアの沿岸地方の動きを（おそらくは統治者顕彰碑としての誇張もふくめて）伝えるものであることは、確かとみてよいであろう。碑面の文字をたどってギリシア語に比定されるリュキア語の名詞（主に人名・神名・地名などの固有名詞）とリュキア語本来の単語で既知のものとを組み合せてゆくと、「まるで曇りガラスを通して見るように」[*21] ではあるが、トゥーキューディデースの第 2 巻や第 8 巻に語られた出来事が、リュキア側から見たこととして記述されている、と読みとれるからである[*22]。Kalinka 1901, 46 が同定した語のうちで Melchert 2004 あるいは Neumann 2007 によってもほぼ確定されたものをいくつか挙げると：a45 milasãñtra- (*Μελήσανδρος*); a55 humrχχa- (*Ἀμόργης*); b22, 23 trijerẽ (*τριήρης*); b27 ijãnisi (*Ἴωνες*); b27, 64 sppartazi (*Σπαρτιᾶται*), atãnazi (*Ἀθηναῖοι*); b59 ntarijeuse/i (*Δαρεῖος*); b59–60 ertaχssiraza- (*Ἀρταξέρξης*); c11, 14, 15 kizzaprnnã (*Τισσαφέρνης*)[*23] などがある。ただし、その音価つまり耳で聞く響きについてみれば、ギリシア語と異なる語形をもつ χbide (*Καῦνος*)[*24]、trm̃mis (*Λύκια*) などの場合はいうまでもないが、人名等のギリシア語と共通する単語でさえもギリシア語のそれ[*25] とは隔たっていたことが推測できる。

石碑の主人公であるクサントスの統治者は、19 世紀以来 Kherêi / χerẽi（TL44 a47, 48, b23 にみえる）とされていたが、Bousquet 1992 は碑の a 面冒頭第 1 行の復元、c 面のギリシア語韻文（後述）や、N320（レートーオンの 3 言語併用碑文）と同じ神域の周辺で出土した碑文断片の検討などから、Kheriga（ギリシア名 *Γέργις*. TL44 a[1],10, c37, 50 にも出る）であると主張してこの一族の系譜を推定した（*FdX* tome IX, 167sqq.）。しかし Neumann 2007 *GLyk* は、χerẽi (Bousquet の字訳では Kherêi) については "PN [人名]。lyk. Dynast" としているが、χeriga (s.v. χariga) についてはこれがクサントス碑の主人公であるとは確定していない。長い文献リストは、これが研究者のあいだで未だに見解の一致していない問題のひとつであることを示しているが、本稿では、この主人公を「ケリガ：Kheriga / *Γέργις*」とする Bousquet の読みに従う。

---

*21 Bousquet, *FdX*, tome IX, 175.

*22 Melchert 1993 や Schürr 2007 は、碑の北面 TLc3–9 の数行は、411 年頃の Tissaphernes（リュディアのサトラップであった）のカウノス滞在、スパルターペルシア間に繰返された協定の締結など（『戦史』第 8 巻）においてこの地の統治者の果たした役割を伝えている、と推定している。

*23 ペルシアの将である彼の名は、ペルシア名を介して同定されている。

*24 この語は、レートーオンの 3 言語併用碑文（N320）のギリシア語（第 7 行）とリュキア語（第 8 行）の対応から解明された。

*25 当時のギリシア語の「耳で聞く響き」については *OCD*³ s.v. Greek language; pronunciation, Greek に依拠する。

3.1　クサントス碑文（TL44）c 面のギリシア語韻文

クサントスの石柱には、先述のように、北面の第 20 行から 31 行までギリシア語が刻まれている。行初の 1、2 文字が欠損しているところもあるが、12 行全体としては崩落を免れて、遺跡に建っている部分（のほぼ最上部）に属している。前後にそれぞれ 1 行分の空白がおかれて、その上のリュキア語部分とその下のミリア語部分とから明瞭に区別されている。文字を刻む石工も交代しているのであろうか。12 行のギリシア語テキストは、23 行と 24 行の行初欠損部分の復元以外では Kalinka 1901, 43 と Bousquet 1992, 147 との間に読みの違いがないので以下に Bousquet のテキストを、逐語的な邦訳とともに提示する：

[*'E*]*ξ οὗ τ' Εὐρώπην* [*Ἀ*]*σίας δίχα πόν*[*τ*]*ος ἔνεμ*[*ε*]*ν,*　20
[*ο*]*ὐδές πω Λυκίων στήλην τοιάνδε ἀνέθηκ*⟨*ε*⟩*ν*
[*δ*]*ώδεκα θεοῖς ἀγορᾶς ἐν καθαρῶι τεμένει,*
[*ἔρ*]*γων καὶ πολέμου μνῆμα τόδε ἀθάν*⟨*α*⟩*τον*
[*Γέ*]*ρ*[*γ*]*ις ὅδε Ἁρπάγο υἱὸς ἀριστεύσας τὰ ἅπαντα*
　[*χε*]*ρσὶ πάλην Λυκίων τῶν τότ' ἐν ἡλικίαι,*　25
[*πο*]*λλὰς δὲ ἀκροπόλες σὺν Ἀθηναίαι πτολιπόρθωι*
[*π*]*έρσας, συνγενέσιν δῶκε μέρος βασιλέας.*
Ὧν χάριν ἀθάνατοί οἱ ἀπεμν⟨*ή*⟩*σαντο δικαίαν·*
ἑπτὰ δὲ ὁπλίτας κτεῖνεν ἐν ἡμέραι Ἀρκάδας ἄνδρας,
Ζηνὶ δὲ π⟨*λ*⟩*εστα τρόπαια β*⟨*ρ*⟩*οτῶν ἔ*[*στ*]*ησεν ἀπάν*⟨*τ*⟩*ων,*　30
καλλίστοις δ' ἔργοις Κα[.]*ίκα γένος ἐστεφάνωσεν.*

23 [*ἔρ*]*γων* Bousquet, [*νικ*]*έων* Kalinka;　**24** [*Γέ*]*ρ*[*γ*]*ις* Bousquet, [*Χη*]*ρεις* (J. P. Six), ...]*ς* Kalinka.　**31** *Κα*[*σ*]*ίκα* vel *Κα*[*ζ*]*ίκα* Bousquet, *Κα*[*ρ*]*ίκα* Kalinka.

海がエウローペーをアシアーから隔てて以来、｜リュキア人のだれも、いまだこのような碑を奉献したことはない、｜アゴラの清浄なる神域の内に、12 神に、｜戦いの勲功の、これなる不滅の記念碑を。｜この［ゲ］ル［ギ］スはハルパゴスの子、すべてにおいて最強の者、｜腕の力で、戦いにおいて（?）、当時の若いリュキア人のなかで、｜町を滅ぼすアテーナイアーの神助によって多くの城市をば｜破壊し、親族に王の領分を分ち与えた。｜かれの武勇に、不死なる神々は正しく報いた。｜かれはアルカディアの重装歩兵七名を一日のうちに倒し、｜だれよりも数多い戦勝

碑をゼウス神に建立し、｜華々しい勲功の数々によって、K- 一族に誉れの冠をもたらした。

この短詩は石碑の主人公の武勲を讃えるものであるから、第 24 行冒頭の「ハルパゴスの子」の名を何と読むか、末尾第 31 行 Ka[ ]ika の欠損 1 字をどう補うかによって主人公が変わることになるが、ここでは上述したように、「Harpagos の子 Kheriga / *Γέργις*」、「Kheziga（の一族）[*26]」とする Bousquet の読みに従って「ゲルギス」として、この報告を先へすすめたい。当面の興味はこの短詩の作者の方に向けられるからである。

この TL44 の短詩には作者名が刻まれていないが、上述したレートーオン周辺（本稿 2.2）出土の断片からは、作者の存在を示す、あるいは推定させる記述が読みとれるという。以下にその調査報告（*FdX*, tome IX 1992, 147–188 とくに 155–166）に依拠して、作者問題に関する Bousquet の推定の概要を紹介する。

問題の断片はいづれもゲルギスの息子である Arbinas（アルビナス：リュキア名 Erbbina として TL44a25 および d53 にも出る）の頌徳文 3 点、したがって前 4 世紀初期に位置づけられるもので（Bousquet による A、B、C の番号を用いる）[*27]、A と B はおそらくはアルビナスの像の台座であった部分の A 面と B 面に刻まれたものと考えられ、両面はギリシア語のみである[*28]。A はギリシア語 19 行で冒頭の 3 行と各行行末以外はよく残っているが、B はローマ時代に再利用されたために断片化がすすんでいて、エレゲイア風の 34 行に復元されたが空白が多い。C は 1962 年に発見された断片で、アルビナスがアルテミス女神に奉献した建造物の基部の一部とみられ、右面にギリシア語 8 行、左面にリュキア語 2 行（N311）が残っている（*FdX*, tome IX, 150 に図示あり）。

短詩の作者という問題でとくに注目されるのは A と C である。A では、この像がかれ自身からの奉納であること、かれが一か月でクサントス、ピナラ、テルメッソスの 3 市を征服したこと、賢者にふさわしいあらゆる技：弓、武勇、馬術に優れていたことなどをヘクサメトロス 17 行の本文で記してかれの偉業を讃えたあと、1 行あけて次に « *Σύμμαχος Εὐμήδεος Πελλανεὺς μάντις ἀ[μύμων]* | *δῶρον ἔτευξε ἐλεγῆια Ἀρβίναι εὐσυνέ[τω]ς* ». (「Eumedes の息子にして Pellana の人、非のうちどころなき占師 Symmachos が、Arbinas に献呈するため

[*26] Kheziga (vel Khesiga)（ギリシア名 *Κοσσίκας*）の読みは、ヘーロドトスの伝える「クセルクセースの艦隊指揮官の一人でリュキアの人」（7.98）の人名 2 通りの読み方：*Λύκιος Κυβερνίσκος Σίκα* (codd., Hude, Stein): *Λύκιος Κύβερνις Κοσσίκα* (conj. Meyer, How-Wells, Legrand) のうちの後者を支持する根拠である（cf. Bousquet 1992, 174; Neumann *GLyk* s.v. χeziga）。

[*27] これらの短詩は、さきに全文をひいた TL44 のギリシア語詩とともに、P. A. Hansen, ed.; *Carmina Epigraphica Graecae*, v. I (Berlin–New York 1983) に n° 177, v. II (1989) に n° 888 i–iii としても入っている。

[*28] この台座の、他の 2 面にはリュキア語が残っており（*FdX*, tome IX, 181–187）、それぞれ N324, N325 として Neumann 1979 にも収録されている。

に、このエレゲイアを巧みな技で作成した」）という、作者の出自、職業、名を示す署名（sphragis）2行が、こちらはエレゲイアの詩形（le distique élégiaque）で付加されている。トゥーキューディデース第8巻によれば、Pellana（ペレーネー）は、前413年冬にラケダイモーン政府が同盟諸市に軍船の建造を割当てたとき、他市とともに船を供出しており（8.3）、そのペロポンネーソス船隊はミーレートスにある海軍基地に向かう途中でいったんリュキアの西、カリア地方のカウノスに入港している（8.39）。Bousquet は、A の作者すなわちシュンマコスがペレーネー出身であることに注目して、シュンマコスは『イーリアス』の従軍占師カルカースのように軍船に乗り組んでいたが、カウノス寄港のさいになんらかの事情で下船してそのままクサントスの統治者の館に行ったのではないか、と推論する。そしてさらに、もうひとつの断片 C については、作者が若いアルビナスの勲功と姿形とを讃えたあとに、« *Παιδοτρίβας ἐπ*[...] | *Δῶρ' ἐποίησε ΕΛ*[...] »（「パイドトリベースがこの el［egeia を］Arbinas に献呈した」）と記しているので、この短詩の作者は、名は出していないがアルビナスの体育教育係（maître de gymnastique）であったと分かる、とする。

ここでさきのクサントスの碑 TL44 に戻れば、こちらはアルビナスの父ゲルギスの顕彰碑であるから建立年代は前5世紀末で、上記 ABC の3断片よりもいくらか古い。詩そのものの語彙や措辞については、ABC との共通点も多く、『イーリアス』の語句がそのまま、あるいは変形されてこれらの4点の詩に組み込まれている例は、Bousquet 1992, 164 に列挙されている。また、TL44c20（クサントス碑の短詩冒頭）の1行が、Simonides（前6–5世紀）に擬せられて「エウリュメドーンの戦い*29 に斃れたアテナイ戦士たちに」向けたとされるエレゲイア詩の第1行とまったく同一であることは、19世紀以来指摘され、また議論されてきたところである*30。クサントス碑文の詩はヘクサメトロスとペンタメトロスとを、distichon で通さずにやや不規則に組み合わせた「エレゲイアふう」の形式*31 をとっており、語形の点でも、時に c21 *ΤΟΙΑΝΔΕ* のようなドーリス方言形と c26 *ΑΘΗΝΑΙΑΙ* のようなアッティカ方言形が混在している。また表記の点でも、-*ει*（c29 *ΚΤΕΙΝΕΝ*）と -*ε*（c21 [*O*]*ΥΔΕΣ*, c30 *Π*⟨*Λ*⟩*ΕΣΤΑ*）や、-*ου*（c23 *ΠΟΛΕΜΟΥ*）と -*ο*（c24 *ΑΡΠΑΓΟ*）の両方が使われていたりする。これらの「ゆれ」は、単なる誤りというよりはおそらく当時の、つまり「ヘレニズム期のコイネー」が、韻文においても、徐々に形成され始めるその時代

*29 前469年頃リュキアの東隣パンフュリア地方の海陸両方で行われ、デロス同盟軍がペルシア軍に勝利した戦い。

*30 Kalinka 1901, 47：問題の詩は、ed. Th. Preger, *Inscriptiones Graecae metricae: ex scriptionibus praeter Anthologiam collectae*, Leipzig 1891, 213, No. 269 [Simonidis (142 Bgk.)] としてネット上でみられる。

*31 Bousquet 165 n. 13; ここでは文字による表記と実際の発音との関係の問題点にも言及している。また断片 A と B の韻律については 156–159 を、TL44 も含めた « dorisme »（*Λητῶι* – *Λατοῖ* – *Λατώ* の混在など）については 163 n. 8 を参照。

のギリシア語の状況を反映しているのであろうという[*32]。そして統治者を讃える内容の点ではホメーロスとくに『イーリアス』の英雄たちがつよく意識されている。クサントスの大石柱の北面に刻まれた 12 行の詩やレートーオン周辺から出土した碑文断片からは、リュキアの統治者（デュナステース）の館には、ギリシアの叙事詩や抒情詩をよく知っていて、その形式や措辞を借用しながら碑文の主人公の功績を讃え伝えるという目的に合わせた韻文をつくることのできる、おそらくギリシア出身の人々が、占師や教育係などとして統治者の側近くにいたことが読みとれるのである。館で歓待され、歌を披露しつつ土地の伝説に関わる情報を集めて創作に活かすのは、おそらくホメーロス自身の体験でもあったであろう[*33]。また、現存する 5–4 世紀の碑文史料からの証言に加えて、ヘーロドトス（4.35）にはデーロス島に伝わる古い讃歌の作者として「*Ὠλὴν ἀνὴρ Λύκιος*（リュキアの人 Olen）」への言及もある[*34]。

3.2 韻文作者たちの言語環境

クサントスの碑文にかいま見られるこのような詩人たちの存在は、同時に、その聴衆の存在をも示唆するであろう。ギリシア語は、おそらくホメーロスの時代からアレクサンドロス大王の頃までのリュキア地方で、統治者一族とその周辺など教養ある人々の言葉とくに文語として、貿易商人、建築職人、石工などの職業上必要な言葉として、程度の差はあれよく知られた言葉だったであろうし、また役人であれば公用語のアラム語も必要であったはずである。土地のリュキア語しか話さない（必要としない）人々のいる一方で、それぞれ必要の度合いに応じてバイリンガルやマルチリンガルの人々も少なくなかったと考えられよう[*35]。

このような多言語使用の状況は、すでに『イーリアス』においても設定されていると考えられる[*36]。第 6 巻の、リュキアからの援軍を率いるグラウコスとアカイア方の勇将ディオメーデースが名乗りあう場面（144–211）でグラウコスの語るところによれば、かれとその従兄弟にあたるサルペードーンは、ギリシアとリュキア双方の血を引く者として登場

---

*32 Bousquet 163. もちろん詩の作者とそれを碑に刻む石工とは別人であろうから、両者間の伝達如何という推定困難な問題もありうる。

*33 久保 2007, 1–23; West 2011, I.2–3 節、とくにリュキアとの関連は 23。小アジアの西南沿岸地方が、古代から今に至るまで、ホメーロス自身の出身地ないしは創作の拠点と考えられていることはいうまでもない。

*34 Olen について Pausanias（8.21.3, 9.27.2, 10.5.7）は「ヘクサメトロスで歌った最初の人」とする。

*35 上掲註 8, Le Roy 1981/83, 222–223.

*36 この節で扱う、小アジアにおけるホメーロスをめぐるマルチリンガルな環境については、Bryce 2006 がアナトリア研究の側からホメーロスを扱って説得力をもつ考察をしている（とくに Ch. 1, 7–28）。

している。自分の領地の農民や戦場の兵士と話す時[*37]にはリュキア語、館の中やアカイアの将を相手にする時にはギリシア語という前提が、ごくあたりまえのこととして、ギリシア語を聴く聴衆に受けとられる、と作者は知っていたのであろう。ではトロイアの人々についてはどうか。歴史事実としてトロイアの人々が何語を話していたか、印欧バルカン語派のフリュギア語とかミューシア語であったかもしれないが、これは未だ定説としての答えが出されていない問題である[*38]。しかしホメーロスとしては、リュキアの場合と同様、少なくともプリアモス王をはじめとする館の一族とその周辺の人々は、土地の言葉[*39]と並んでギリシア語も使う人々である、という設定で作っていると考えられる。ではギリシア本土で『イーリアス』を聴く人々についてはどうか。一般的には、トロイアとギリシアとは別の言葉である、という了解が基本にあったといえる。それは、ゴルギアスの「パラメーデースの弁明」(DK82.11a) の中で、トロイア方に内通したとして咎められたパラメーデースが、「ギリシア人である私がトロイア方に内通しようとするなら、通訳がいてこそ (ἀλλὰ μεθ' ἑρμηνέως) 言葉が通じる。しかし通訳を入れたら第三者が入ることになるのだから、内通など成り立ち得ない」という論法で無実の弁明をしていることからも分かる。一方、伝クセノフォーンの『アテーナイ人の国制』には、アテーナイ人は外国との接触が多く好奇心が強いので言葉もあちこちの言葉からあれこれと選んでまぜて使っている、との話があり (*Ath.* 2.8)、トゥーキューディデースには、北西ギリシアのアンフィロキア地方では、ギリシア語を「習得した」地域とそうでない非ギリシア語地域とが隣接している、とも記されている (2.68 および 2.80)。このように方言の違いに加えてギリシア語以外の言葉が使われているバイリンガルな地方は、ギリシア本土にもあった。こういう状況が短期間に生じたとは考えられないので、本土の聴衆についても、ホメーロスはやはりバイリンガル、マルチリンガルな言語環境を設定している、とみることができよう。

4.1　ホメーロスにおける γλῶσσα の用例と『イーリアス』4.438.

以上、『イーリアス』に歌われたトロイア方援軍の言葉のひとつとしてリュキア語をとりあげ、実見した碑文 (前 5–4 世紀) を紹介して、概略ではあるが、リュキア語が、とく

---

*37 サルペードーンが兵士を激励する場面 (12.409–413)、かれがグラウコスに伝える、領民の言葉 (12.318–320) など。

*38 *Oxf. Hbk*, 710–711.

*39 『イーリアス』で女たちが戦場からつかのまの帰還をしたヘクトールを取り囲んで、身内である兵士たちの消息を尋ねる場面 (6.237–241)、ヘクトールが兵士に呼びかける場面 (12.440–441) など。なお、このようなバイリンガルの現代における典型的な 1 例として、各種の報道で見る Daw Aung San Suu Kyi が思い浮かぶ。

に語彙の点で印欧語系のなかでも特殊な位置を占める「アナトリア語派」のひとつであること、その文字が、ギリシアアルファベットを基にしてはいるがギリシア語にはない独自の「音」を表す文字ももっていること、そしてギリシア語が詩の言語としてリュキア語碑文の中に用いられている例をみてきた。碑文のリュキア語を、復元された音価をたよりに声に出して読んでいると、トロイアの平原に集まったリュキア勢のざわめきが、遠く微かではあるが、「実感」をおびて聞こえてくるように思うのは、誤りであろうか。このような印象を考察の基底に保ちながら、あらためて『イーリアス』を読んでみたい。とりあげるのは第 4 巻、トロイアの平原に両軍が集まり、整列して動き出したところの描写である。

Il. 4.436: *ὥς Τρώων ἀλαλητὸς ἀνὰ στρατὸν εὐρὺν ὀρώρει,*「そのように［＝群がった雌羊の啼き声のように］トロイア勢の広い陣営に戦いの叫び声があがっていた。」につづく 2 行：

437: *οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμὸς θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς,*
438: *ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες.*

ここは従来、「というのも皆がみな同じ言葉、一つの声を、もってるのでなく、｜方々から呼び寄せられた兵（つわもの）らとて、言語が混じっていたからである、」（呉茂一訳）にみられるように、*γλῶσσ' ἐμέμικτο* の *γλῶσσα* を、それぞれ異なる言語集団から来た兵士たちがそれぞれの言語で声をあげた（それで言語が混じりあった）、と解されてきた。それに対して、『フィロロギカ』第 3 号所載の安西論文[*40] では、「なぜなら、彼らすべての声は同じではなく、ひとつでもなかったからだ。｜発言は、混じりあったもので、男たちは多くの語りかけを受けていたからだ。」（p. 51）として *γλῶσσα* を「発言」とする訳を提案している。本稿筆者はこの提案に対して疑問をいだき、*γλῶσσα* は、個人の発話行為である「発言」（parole）ではなく、一言語共同体内の共通コードとしての「言葉」ないしは「言語」（langue）[*41] と訳すべきではないかと考えるので、ここでホメーロスにおけるこの語の用例を検討しておきたいと思う。

ホメーロスには *γλῶσσα* の用例が単数複数あわせて 12 例あり、まずその半数にあたる 6 例は、解剖学的にみた、口中の一器官としての「舌」（*Il.* 5.74, 5.292, 17.618：人間の場

[*40] 安西眞「言語と人間の社会的集団——*Il.* 4.422–45 の理解をめぐって」in『フィロロギカ』III, 48–65. その 51–53 部分に限定しての疑問提出が、本稿のこの節である。glossa 理解の結論としては従来の説につくことになるので Cambridge 版注釈（ed. G. S. Kirk 1985, ad *Il.* 437–8）など既存の研究に負うところは大であるが、記述が煩雑に過ぎるのを恐れて、ここでそれらを一々とりあげて検討することは避ける。

[*41] 人間の言語活動を、伝達のための潜在的な記号体系である「言語」langue と、その運用の結果である具体的な個々の「言／発話」parole とに分ける、F. de Saussure に基づく古典的な考え方による（*Cours de linguistique générale*, pub. par Ch. Bally et A. Sechehaye, éd. critique préparée par T. de Mauro, Paris 1973, 'Introduction', Ch. III–V)。邦訳：小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店)。

合、*Il.* 16.161, *Od.* 3.332, 3.341：動物の場合）を意味し、「言葉」とは全く無関係である。

次に γλῶσσα を人間の発話を支える器官の一つとしてみた例は 3 例：

> *Il.* 1.249: τοῦ καὶ ἀπὸ γλώσσης μέλιτος γλυκίων ῥέεν αὐδή.「かれ（ネストール）の舌からは蜜より甘い声が流れた」
>
> *Il.* 2.489: οὐδ' εἴ μοι δέκα μὲν γλῶσσαι, δέκα δὲ στόματ' εἶεν,「たとい私に十枚の舌、十の口があろうとも」
>
> *Il.* 20.248: στρεπτὴ δὲ γλῶσσ' ἐστι βροτῶν, πολέες δ' ἔνι μῦθοι | 249: παντοῖοι, ἐπέων δὲ πολὺς νομὸς ἔνθα καὶ ἔνθα.「人間の舌はよく回るもの、中には様々な話がたくさんあって、言葉があちこちと（行交う）牧場は広い」

これら 3 例はいずれも γλῶσσα をたんなる人体の一部としてではなく言葉を発する器官の一つとしてとらえている点で、最初にあげた 6 例にある「槍で舌の下を突き通す」や「生贄獣の舌を切る」などの「舌」の場合とは異なるが、この語によってさし示されているのはやはり「舌」であって「言葉」ではなく、「舌」としか訳せない。

γλῶσσα の 12 の用例中、当面の問題である *Il.* 4.438 をふくむ次の 3 例（*Il.* 2.804, 4.438, *Od.* 19.175）のみが人間の「ことば」を指し、訳語として「ことば」／「言語」を当てることのできるものである：

> *Il.* 2.803: πολλοὶ γὰρ κατὰ ἄστυ μέγα Πριάμου ἐπίκουροι,
>
> 804: ἄλλη δ' ἄλλων γλῶσσα πολυσπερέων ἀνθρώπων.
>
> 「プリアモスの大いなる都にいる援軍は数多い、｜そして言葉は互いに異なっているのだ、広く散らばった男たちの（言葉は）。」

ここはゼウスの使者として来たイーリス女神がヘクトールに忠告するところで、トロイア方援軍は各地から集まっていて言葉も互いに異なるから、各指揮官（ἕκαστος ἀνὴρ）が自分の配下の兵士に指示して領国ごとに整列させるように（κοσμησάμενος πολιήτας）、との趣旨である（804–806）。この γλῶσσα はあきらかに各言語集団の「言語 langue」をさしている。また、『オデュッセイア』の例では：

> *Od.* 19.174: ἐν δ' ἄνθρωποι | πολλοὶ ἀπειρέσιοι, καὶ ἐννήκοντα πόληες.
>
> 175: ἄλλη δ' ἄλλων γλῶσσα μεμιγμένη, ἐν μὲν Ἀχαιοί,
>
> 「そこ［クレタ島］には数えきれぬほど多くの人々がいて、90 の町があった。｜そして言葉は互いに混在していた。そこにはアカイア人も……」（このあとクレタ人、キュドーニア人、ドーリア人、ペラスギア人とつづく）。

語り手であるオデュッセウスは、クレタ島はギリシア各地からの人々が集まっているところで言葉も混じりあっていると言う。いろいろな方言（言語共同体成員間の共通コードである langue）の共存をさすと考えられる。

そして当面の問題である『イーリアス』第 4 巻にもどれば、

Il. 4.437: *οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμὸς θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς,*
438: *ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες.*

「かれら全員の喧噪は同一でなく呼び声も一つではなくて、｜言葉は混在しており、兵士たちは何度も呼ばれていたからである。」と、逐語的には訳せるであろう。この *γλῶσσ' ἐμέμικτο* (4.438) では *γλῶσσα μεμιγμένη* (*Od.* 19.175) と、同じ動詞 *μείγνυμι* を使っており、どちらも、さまざまな集団の言語が（ギリシア語のなかでの方言であれ*42、地方あるいは領国ごとに異なる言語であれ）まじりあって聞こえてくる状況の描写と考えられるのである。また、*οὐδ' ἴα γῆρυς* の *γῆρυς* は語源的には一種の儀式的な特殊な「呼び声／叫び声」を意味するとされる*43 ので、これを上にひいた 2.804–806 の領国ごとに異なる言語でなされる隊長たちの呼びかけの声と解することもできよう。両軍が激突へと進むこの場面で、アカイア方は、それぞれの指揮をとる者は命令を発するが、それ以外は兵士全員が黙々と進む、これほどの大軍が、「胸の中に声（*αὐδή*）をもっていないかのように」、隊長たちをおそれて、沈黙のうちに（428–431）。トロイア方は全員が異なる騒音をたて、指揮官の呼び声も一つではなく、異なる言語がいりみだれ、兵士たちは何度も呼ばれていた。

ホメーロスが、アカイア方の沈黙と規律にトロイア方の喧噪と混沌を対置しているのは明らかである。そしてかれが後者の騒音は *γλῶσσα* の違いからくる、というとき、それは各集団の「言語」[langue] の違いを意味しているのだとする伝統的な見解に、本稿筆者も従いたい。そして、*γλῶσσα* を兵士たち個々人の「発言」[parole] とする解釈に対しては、「発言」を指す語は、むしろ、先に引用した *Il.* 20.249「言葉が行交う」の *ἔπος, ἔπεα* であろうと指摘したい。まだ網羅的に調べてはいないが、ヘクトールがイーリス女神の言葉をすぐ聞き分けるところで *ὣς ἔφαθ'· Ἕκτωρ δ' οὔτι θεᾶς ἔπος ἠγνοίησεν* (*Il.* 2.807) の例、またアキレウスの挑発に対してアイネイアースが「私を言葉で脅せると思うな」*μὴ δὴ μ' ἐπέεσσί γε νηπύτιον ὣς* | *ἔλπεο δειδίξεσθαι* (*Il.* 20.200–201) と答えるのもそれである。「発言」のもっとも顕著な例が、定型句 *ἔπεα πτερόεντα*「翼もつ言葉」であることはいうまで

*42 R. B. Rutherford ed. (*Homer Odyssey Books xix and xx*, Cambridge 1992, 158) はこの箇所への註の中で、"..that different Greek dialects and non-Greek languages are mentioned together here, and that it is not clear how conscious the early Greeks were of the distinction." という A. M. Davies の言葉を引用している。

*43 Chantraine, *DEG* s.v. *γῆρυς*: « terme noble et religieux ».

もない。

なお付加すると、ヘーシオドスには *γλῶσσα* が 5 例あるが、「怪物の黒ずんだ舌」（*Th.* 825）以外はいずれも人間の、言葉を発するための器官としての「舌」である：「腕の力」に対比される「舌の力」（*Op.* 321–322）、「倹約好きの舌は最上の宝」（*Op.* 719）、「舌に甘い露を注ぐ」（*Th.* 83）、「舌の喜びのために偽りを言ってはならぬ」（*Op.* 719）の 4 例。そしてじっさいの「発話」のほうは、「口から蜜のような言葉（*ἔπεα*）が流れる」（*Th.* 84）、「不愉快な言葉（*ἔπος*）を吐いたら」（*Op.* 710）となっている。

また、この *Il.* 4.438 行では *πολύκληροι δ' ἔσαν ἄνδρες* の *πολύκληροι* の意味も問題であろう。従来はさきにひいた呉訳が端的に表しているように「方々から呼び寄せられた」とされていて、それに対する疑問と試訳「男たちは多くの語りかけを受けていたからだ」（p. 51）*44 が安西論文によって出されている。本稿では「兵士たちは何度も呼ばれていたからである」と試訳してみた。「呼ぶ」のは指揮官たちであるという了解で、進軍中も騒ぎ立てたり（隊列を乱す者も出たり）という混乱の中で、各指揮官がそれを大声で制したり命令を繰返したりしている情景を想定するのであるが、確定はできていない。おそらく、この合成語 *πολύκληρος* の難解な点は、とくに前半 *πολυ-* の意味にあるのではないか。後半の *-κλητός* は *καλέω* から派生した形容詞で、*ἐκκλησία* « assemblée du peuple (convoqué) à Athènes » など多くの法律関連の語を生んでいることから、意味の中核は「名を呼んで呼び出す、召集する」であるとされる（Chantraine *DEG* s.v. *καλέω*）*45。しかし *πολυ-* については、*πολύς* が「多数の／しばしば起こる」に用いられることは既知であるが、例えば Frisk（*GEW* s.v. *καλέω*）の記述 « *πολύ-κλη-τος* 'vielgerufen', d.h. 'von vielen Orten herbeigerufen'» は、筆者には十分に説得的であるとは言いがたい、つまり「数多く呼ばれた」と「数多い場所から呼ばれた」とを等価とするのは無理ではないのかという疑問や、他に類例はあるのかという疑問は消えない。*πολυ-*＋過去分詞型（受動的）形容詞の例（*πολυ-άρητος* < *-αράομαι*, *Il.* 19.404, *Od.* 6.280 など）を多数集めて詳しく検討する必要があると考えている。なおこの語について、本稿査読者の一人から、本稿筆者の文脈であれば、ここを「様々な言葉で呼びかけを受けていた」ととるのが妥当ではないか、という指摘がなされた。詩の状況としては、その通りであると思う。ただ、*πολυ-* なる語そのものの意味として、それが過去分詞型形容詞と結びついたときにも、量的な「多数性」に加えて（あるいは「多

*44 「多くの語りかけ」は、戦意高揚のための神々からの激励（439 行以下）をいう、と読む。本稿筆者は、glossa を「伝統的に」解しても、439–445 行をトロイア方の描写であるとする安西論文には抵触しない、と（きわめて楽天的に）考えている。

*45 *πολύ-κλητος* については « 'applé de tout part', dit des alliés des Troyens (*Il.* 4.438; 10.420). »

数性」よりもむしろ）質的な「多様性」を示す（逐語訳としては「多様に呼ばれる／多様な呼び方をされる」となる）ことができるのかどうか[*46]、が筆者にはまだ納得できていないのである。

4.2 他のトロイア方援軍の言葉

リュキア勢は『イーリアス』のトロイア方ではもっともよく登場する援軍であるが、「援軍の言葉」を考えるなら、本稿ではできなかったが、他にもバルカン語派のフリュギア語やミューシア語も考察の対象にすべきであろうし、アナトリア語派でもカリア語や、リュディア語（*Il.* 2.864–866 でマイオーニア人とよばれる人々がその話し手であった）などの言葉も扱うことが必要であろう。アナトリア語派の諸語はいずれも、文字としては古い形のフェニキア・ギリシア文字アルファベットを基にしていながらそれぞれ特有の音価を推定される記号も少なからずもっており、リュディア語のように史料の大多数が右から左へという書字方向をみせるものもある。マルチリンガルな状況は沿岸地帯では共通していたであろうが、共存する言語間の隔たりは小さくなかったはずであるし、ギリシア語の一方言を母語とする人がリュキア語と接触した場合には、隔たりの感覚に大小の差はあれ「自分の言語とは違う言語」として（民族とか国とかの意識の有無とは関係なく）認識したであろう[*47]。

そのような状況にあって、アナトリア諸語の中でもとくにカリア語は、リュキア語よりもさらに、ギリシア語からの隔たりが大きかったと思われる。カリア語は、以前から出されていた印欧語系アナトリア語派への帰属説が、Adiego による大部な研究成果の公刊（2007 年）を機に定説となりつつあるが[*48]、文字の起源や音価[*49] にも語彙にも未解明の点が多く残っている。史料の出土地が、エジプト[*50]（約 220 点）、カリア地方（約 30

[*46] "Even when translated 'much' in English, πολυ-terms, I think, almost always imply, especially in active compounds, variety; thus Achilles was 'bold in various ways'.." (Stanford 1950, 109 n. 1, 下線本稿筆者）という指摘がある。

[*47] よく指摘されることであるが（cf. 上掲註 42）、初等教育や新聞・テレビなどのメディアが普及していない時代では、方言と他言語との区別がどの程度意識されていたか疑問でもある。

[*48] Adiego 2007, 4, 345–347. *Oxf. Hbk*, 710: « indubitably an Indo-European language »（Melchert 執筆）.

[*49] Adiego 2007, 232–233 の « Uralphabet » リストには 31 種（変種を含めると 50 種を超える）文字記号があり、リュキア文字、リュディア文字などと同様、古いギリシア・アルファベットを基にしたものと推定されている。

[*50] エジプトには、傭兵としてのカリア人や（イオーニア、ドーリス、ロードス地方などからの）ギリシア人が、前 7 世紀 Psammetichos 1 世時代から常駐していた。また、外国語に巧みなカリア人の例として、リュディアのサトラップであった Tissaphernes が、スパルタへの使節として側近の一人でペルシア・ギリシア両語を操るカリア人 Gaulites を派遣した話（Thuc. 8.85.2 および久保訳注 ad. loc.）もある。

点)、ギリシア本土（アテネとテッサロニキ各 1 点、いずれも小断片）[*51] と広く、文字記号の数や形が時代と地方によって多くの変種をもつなど等質でなくて、内容（墓碑断片、グラフィッティ）の点でも短く多様性に欠けるなど難点が多いとされる。カリア地方からは、最近では 1996 年と 97 年にカウノス遺跡の港に近い場所で、2 名のアテーナイ市民を proxenoi かつ euergetai にするという、カウノスの民会決議碑文（ギリシア語との 2 言語併用で、推定年代 322 / 314BC. Adiego 2007, 154–155. *C.Ka5*）が、連続する 3 個の断片の形で発見された。3 個を合わせると ca. H71.5 x W21.0–28.5 x D8.5cm、上部がカリア語 18 行、下部がギリシア語 8 行から成る碑文で、本稿 2.2 節でとりあげたレートーオンの 3 言語併用碑文と同じくフェティエの博物館に展示されている。ドラマティックと形容したいような発掘の経過と碑文内容の解明は Frei-Marek 1997 および 1998 に詳しい。

トロイア方援軍の言葉に関心をもつ立場からは、Adiego2007, 203 の対照表が興味深く、上述のカウノス碑文に出るギリシア語とカリア語（字訳）の対応例：*Καυνίοις* – kbidn[*52], *Ἀθηναῖον* – otonosn などからだけでも二つの言語の間の、耳に聞こえる違いが分かるように思われる。クサントス碑文 TL44 のリュキア語では、*Ἀθηναῖοι* – atãnazi であったことを考えると、カリア語の話し手が発音する「アテネ人」は、リュキア語の場合よりもさらにギリシア語からは遠く隔たった音として聞こえたに違いない。ホメーロスが、小アジアのあちこちから集まったトロイア方援軍を描くにさいしてカリア人だけを *Καρῶν βαρβαροφώνων* (*Il.* 2.867) と形容したのは、イオーニア地方のギリシア語の響きに慣れた耳には、カリア語の響きがとくに「耳立つ」特徴をもって感じられたことを、聴衆に伝えたかったからかもしれない、と考えている[*53]。

（成蹊大学）

参照文献

印欧アナトリア諸語全般：

1988–1996)『世界言語大事典』 全 6 巻、三省堂（関係項目執筆：松本克己）。
1990) 大城光正・吉田和彦 『印欧アナトリア諸語概説』、大学書林.

[*51] Adiego 2007, Chap. 3, 17–165.

[*52] *Καῦνος* はリュキア語では χbide（上述 2.2 節、註 24）である。

[*53] *Oxf. Hbk*, 20 にみえる、詩人は沿岸旅行のさいに直接カリア語に接して、異なる言語集団であるとの認識をもったのであろう、という見解に同感である。古来多くの議論がなされてきた barbarophonoi の解釈問題には、ここでは立入らない。

1996) P. Daniels & W. Bright, ed.; *The World's Writing Systems*, Oxford. ［日本語版『世界の文字大事典』（朝倉書店）近刊予定］.

2001)『世界言語大事典／別巻：世界文字辞典』、三省堂（関係項目執筆：松本克己）.

2003) S. Hornblower & A.Spawforth, ed.; *The Oxford Classical Dictionary* (3rd ed. rev.).

2004) R. D. Woodard, ed.; *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, Cambridge.

2008) R. D. Woodard, ed.; *The Ancient Languages of Asia Minor*, Cambridge. ［前書から小亜関係を抜出したもの］

2011) S. R. Steadman, & G. Mcmahon, ed.; *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia 10,000 – 323 B.C.E.*, Oxford.

リュキア語：

1901) E. Kalinka; *Tituli Asiae Minoris..* [= *TAM*], Vol. I. *Tituli Lyciae. Lingua Lycia conscripti*, Wien. [siglum TL]

1958) P. Demargne; *Fouilles de Xanthos (FdX)* I: *Les piliers funéraires*, Paris.

1965) S. Pembroke; Last of the Matriarchs. A Study in the Inscriptions of Lycia, in *Journal of the Economics and Social History of the Orient* VIII, 217–247.

1979) G. Neumann; *Neufunde Lykischer Inschriften seit 1901* (*Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 7), Wien. [siglum N] [N = nova]

1979) H. Metzger, E. Laroche, A. Dupont-Sommer, M. Mayrhofer; *Fouilles de Xanthos (FdX)* VI: *La Stèle Trilingue de Létôon*, Paris.

1981/83) Chr. Le Roy; Aspects du plurilinguisme dans la Lycie antique, in *Festschrift Akurgal* 2 in *Anadolu* [*Anatolia*] XXII 1981/1983, (Ankara 1989), 217–226. `http://dergiler.ankara.edu.tr/dergiler/14/712/9000.pdf`

1983) G. Neumann; Zur Erschließung des Lykischen, in *Le lingue indoeuropee di frammentaria attestazione* (Atti del Convegno... 1981) Pisa, 135–151.

1983) 松本克己；クサントスのレートーオン出土の三言語併用碑文とリュキア語研究の現状——特にその統語構造を中心に——in『オリエント』26 (2) 1983, 95–118.

1985) 松本克己；印欧アナトリア語派におけるリュキア語の位置——特にリュキア語の複数主格及び属格語尾をめぐって——in『京都産業大学言語科学研究所所報』6 (2) 1985, 24–53.

1992) A. Bourgarel, H. Metzger, J. Bousquet; *Fouilles de Xanthos (FdX)* IX: *La région nord de Létôon*, Paris, vol. 1, 147–196: Troisième Partie.- Les inscriptions gréco-lyciennes.

1993) H. C. Melchert; A New Interpretation of Lines C 3 – 9 of the Xanthos Stele, in *Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 17 (*Akten des II. Internaationalen Lykien-Symposions Wien 6.-12. Mai 1990*), Wien, 31–34. `http://www.linguistics.ucla.edu/people/Melchert/xanthosc3-9.pdf`

2004) H. C. Melchert; *A Dictionary of the Lycian Language*, Ann Arbor–New York.

2007) Ch. Schuler; Einführung: Zum Stand der griechischen Epigraphik in Lykien. Mit einer Bibliographie, in *Griechische Epigraphik in Lykien. Eine Zwischenbilanz. Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 25 (*Akten des Int. Kolloquiums München, 24.-26. Feb. 2005*), Wien, 9–26.

ibid.) D. Schürr; Formen der Akkulturation in Lykien: Griechisch-lykische Sprachbeziehungen, 27–40.

ibid.) P. Baker–G.Thériault; Prospection épigraphique de Xanthos: bilan et méthodes, 121–132.

2007) G. Neumann; *Glossar des Lykischen* – Überarbeitet und zum Druck gebracht von Johann Tischler (*Dresdner Beiträge zur Hethitologie* 21), Wiesbaden. [*GLyk*]

カリア語：

1997) P. Frei–Ch. Marek; Die Karisch-Griechische Bilingue von Kaunos – Eine zweisprachige Staatsurkunde des 4. Jh.s v. Chr., in *Kadmos* (36) Berlin, 1–89.

1998) P. Frei–Ch. Marek; Die Karisch-Griechische Bilingue von Kaunos – Ein neues Textfragment, in *Kadmos* (37) Berlin, 1–18.

2007) I. J. Adiego; *The Carian Language*, Leiden–Boston.

シデ語：

1969) C. Brixhe; L'alphabet épichorique de Sidé, in *Kadmos* (8), Berlin, 54 –84.

ホメーロス関係など：

1950) W. B. Stanford; Homer's Use of Personal πολυ- compounds. in *Classical Philology* (45), 108–110.

1968–1980) P. Chantraine; *Dictionnaire étymologique de la langue grecque,* Paris. [*DEG*]

1970) R. Hope Simpson–J. F. Lazenby; *The Catalogue of the Ships in Homer's Iliad*, Oxford, 176–183.

1972–1973) Hj. Frisk; *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, 3 Bde, Heidelberg. [*GEW*]

2002) J. N. Adams, M. Janse & S. Swain ed.; *Bilingualism in Ancient Society – Language contact and the written word*, Oxford, repr. 2005.

2006) T. R. Bryce; *The Trojans and Their Neighbours*, London.

2007) 久保正彰；ヤコブス・ホイエル（1651–1689）とホメロス研究――「船のカタログ」を中心に――, in『西洋古典学研究 LV』, 1–23.

2011) M. L. West; *The Making of the Iliad. Disquisition & Analytical Commentary*, Oxford.

［本稿筆者未見］：2005) H. Eichner; Neues zum lykischen Text der Stele von Xanthos (TL 44), in *The IIIrd International Symposium on Lycia, Antalya 07–10 November 2005 – Abstracts*, Dortluk Kayhan–Tarkan Kahya (eds.), 231–238.［以上］

Shorter Note

プラトン『パイドン』62Aの“ἔστιν ὅτε καὶ οἷς”

納富信留

ソクラテス最期の一日の対話を描くプラトン『パイドン』では、「自殺」が神の掟によって禁止されていることが語られる。ソクラテスは死刑判決に従いその日のうちに自ら毒杯を仰ぐという「自死」を強いられるはずであり、「自殺禁止」論は、ソクラテスの「死」への態度を考える上で重要である。他方、その一節（62a2–7）の読み方をめぐっては解釈が紛糾している。古代以来の伝統的な読みは19世紀以降強い批判に晒され、文法的・内容的な問題点が数多く指摘されてきた。だが、日本語訳ではこれまで一貫して伝統的解釈が採用され[*1]、「耐え難くぎこちない」[*2]と呼ばれた言語上の難点は無視されてきた。本小論では、その言語の問題に焦点を当てて、該当箇所の読みを再考する。

問題となる62a2–7には重要な写本上の異読はない。構文と意味の取り方について多様な解釈が提出され紛糾しているが、争点と選択肢はLoriauxとGallopが整理しており、ここではくり返さない[*3]。

62a2 ἴσως μέντοι θαυμαστόν σοι φανεῖται εἰ τοῦτο μόνον
τῶν ἄλλων ἁπάντων ἁπλοῦν ἐστιν, καὶ οὐδέποτε τυγχάνει τῷ
ἀνθρώπῳ, ὥσπερ καὶ τἆλλα[A] ἔστιν ὅτε καὶ οἷς[B] βέλτιον
a5 τεθνάναι ἢ ζῆν, οἷς δὲ βέλτιον τεθνάναι, θαυμαστὸν ἴσως
σοι φαίνεται εἰ τούτοις τοῖς ἀνθρώποις μὴ ὅσιον αὐτοὺς
ἑαυτοὺς εὖ ποιεῖν, ἀλλὰ ἄλλον δεῖ περιμένειν εὐεργέτην.

私が問題とするのは、[A]の箇所にコンマを入れるBurnet (1900, 1905²)のOCT版やStrachan (1995)のOCT新版等の通常の句読法である。この句読法は、それに続くἔστιν ὅτε καὶ οἷς の構文処理を、ギリシア語としてきわめて不自然、あるいは、不可能にするか

---

*1 菊池 (1924)、岡田 (1942) (1946) (1969)、村治 (1947) (1968) (1973)、藤沢 (1959) (1964) (1972)、池田 (1963) (1966) (1968)、松永 (1975)、岩田 (1998)、朴 (2007)、水崎 (2011) を参照。朴 (1993) はこの伝統的読みを擁護している。

*2 Verdenius (1958), 198, “an inexplicable clumsiness of the Greek”; Gallop (1975), 80, “an intolerably clumsy way of expressing the idea”.

*3 Cf. Loriaux (1969), 50–59, Gallop (1975), 79–83.

らである。

[A] で区切る読み方は *ὥσπερ καὶ τἆλλα* を挿入節として独立させるが[*4]、それ以降の処理を難しくすることがこれまでも問題とされてきた。挿入節を挟んで、a3–4 *οὐδέποτε τυγχάνει τῷ ἀνθρώπῳ* と a4–5 *ἔστιν ὅτε καὶ οἷς βέλτιον τεθνάναι ἢ ζῆν* をどう接続させるかで、解釈が紛糾している。

オリュンピオドロスやシンプリキオスに遡る伝統的解釈は、「死が絶対的に生より善い」という主張をこの箇所に読む。その解釈を擁護する Bluck は、"it *never* happens (as with everything else) that death is preferable to life for man only on *some* occasions and in *some* cases"（イタリック原文）と訳出している[*5]。彼は主動詞を *τυγχάνει* ＋分詞（省略）の構文と理解しているが、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* の部分に "only" (*μόνον*) といった過重な負荷をかけて解釈していることが批判の的となってきた[*6]。というのは、*οὐδέποτε τυγχάνει τῷ ἀνθρώπῳ / βέλτιον ⟨ὂν⟩ τεθνάναι ἢ ζῆν* は、文字通りには、「人間にとって、生より死がより善いということは決してない」という意味になり、伝統的解釈の意図とは逆の意味になってしまうからである。他方、同じ構文理解の上でその文を文字通りにとる Burnet は、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* を "(that is at certain times and for certain men)" と丸括弧付きの挿入節で訳出している[*7]。

これまで、[A] の区切りで a2–5 が解読可能と思われてきたのは、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* が *ἐνίοτε καὶ ἐνίοις*（ある時、ある人々に）という副詞句に単純に置換して理解されたためである[*8]。確認しておくと、この表現は、動詞 *ἔστιν* に時の関係副詞 *ὅτε* ／人の関係代名詞 *οἷς* が組み合わされた文である。文法的な説明によれば、不特定の指示詞＋関係代名詞を伴う *ἔστιν* の存在文から先行詞が省略されて成立した文（動詞は単数形）が慣用句的に用いられるようになり、また、関係副詞にも適用されて副詞代替的表現となった[*9]。*ἔστιν ὅτε* の表現には LSJ で "sometimes, now and then" という訳も含まれるが、正確には「～の時がある」(there are times when) という完全文である。Burnet 解釈に従う Rowe が "*ἔστιν ὅτε* and [*ἔστιν*] *οἷς* are independent expressions, not affecting the syntax" と注記しているのは、その理解であろう[*10]。だが、構文から単純に独立させる挿入的な用法がここで適切か、慎重に考察されるべきであろう。

---

*4 この区切りは、Heindorf, Bekker, Stallbaum, Ast, Baiter et al., Hermann, Robin ら、ほとんどの校訂者が採用している。他方、1578 年刊 Stephanus 版は a4 *ἔστιν* の後にコンマを打っている。

*5 Bluck (1955), 43.

*6 Cf. Geddes (1863), 192, Verdenius (1958), 198.

*7 Burnet (1911), 22–23.

*8 Cf. Geddes (1863), 192, Burnet (1911), 23.

*9 Cf. Kühner–Blass–Gerth (1976), §554.4–5, esp. Anmerk. 9, Cooper (1998), §61.5.1–5.5.

*10 Rowe (1993), 127.

LSJ は当該箇所に加えて、ヘロドトス『歴史』2.120 とソフォクレス『アイアス』56 を用例に挙げている。

> Soph. *Aj.* 56–58: *κἀδόκει μὲν ἔσθ' ὅτε / δισσοὺς Ἀτρείδας αὐτόχειρ κτείνειν ἔχων, / ὅτ' ἄλλοτ' ἄλλον ἐμπίτνων στρατηλατῶν.*

この例では、一見 *ἔσθ' ὅτε* が挿入句になっているように見える。だが、「ある時に」がどこを限定するかを厳密に考えると、*ἔσθ' ὅτε* が従属節内に副詞句として挿入されているというより、*ἐδόκει* が *ἔσθ' ὅτε* の主文から hyperbaton となっていることが判る。アイアスは「ある時にアトレウスの息子たちを手にかけた」(従属節内の挿入) のではなく、「ある時にそう思った＝そう思った時がある」(主文) からである[*11]。ヘロドトスの用例も含めて、*ἔστιν ὅτε* はしばしば hyperbaton を伴うが[*12]、その場合、厳密には挿入句ではなく主文を成すものと見なされる。

プラトン著作でこの表現は、『パイドン』74c1 も含めて 30 箇所ほどで用いられる (うち 1 箇所は偽作)[*13]。*ἐνίοτε* や *τότε* と並列される文脈もあるが[*14]、主文への挿入として現れるのは 2 箇所のみである。

> *Resp.* 439c2: *Πότερον δὴ φῶμέν τινας ἔστιν ὅτε διψῶντας οὐκ ἐθέλειν πινεῖν;*
> [*Eryxias*] 404a8: *Οὐκοῦν φαίνοιτο ἂν ἡμῖν ἔστιν ὅτε ἄνθρωπος οὐδενὸς τούτων δεόμενος πρὸς τὴν τοῦ σώματος χρείαν;*

これらの箇所では、確かに *ἔστιν ὅτε* が従属節内に挿入されている。だが、動詞 *φημί* / *φαίνομαι* の目的語には不定詞・分詞が要求されることから、そこにこの表現が組み込まれたことで構文が融合しているとも分析される[*15]。プラトンの用例を見るかぎり、*ἔστιν ὅτε* が常に単純に *ἐνίοτε* と置換される独立句と見なすことには慎重であるべきである。

もし *ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* が挿入句でなければ、[A] での区切り後は asyndeton を成すが、それを回避しようとして接続詞 *ἀλλὰ* や *δὲ* を補うと構文と文意が完全に変わる。実際、Tarán は [A] で文章を一旦完全に切って、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* から新しい文が始まると提案し

---

*11 Jebb: now he deemed that ...; Lloyd-Jones (Loeb): and at one time he thought ..., at another that.

*12 E.g. Pl. *Lg.* 908d, Xen. *Cyr.* 3.1.20, 3.1.24.

*13 *Lys.* 217e5, *Gorg.* 512b6, *Euthd.* 278a5, 296a6 (*bis*), *Phd.* 74c1, *Crat.* 424e1, *Resp.* 415b1, 439c2, 561d1, 575b7, *Phdr.* 237e1, *Tht.* 150b1, 184c3, *Plt.* 303e2, *Phlb.* (32d6: 別の読み？), 36a8, 49d6, *Tim.* 60d2, *Lg.* 708b5, 864c6, 867d5, 893d8, 908d5, 913d3, 925d6, 926a9, b2, 957d4, [*Eryx.*] 404a8.

*14 *ἐνίοτε*, *Lys.* 217e5, *Crat.* 424e1, *Tht.* 150b1; *τότε*, *Resp.* 561d1.

*15 最初の例は、やや不自然ではあるが *ὅτι* でこうパラフレイズされる：*Πότερον δὴ φῶμέν ὅτι ἔστιν ὅτε τινὲς διψῶντες οὐκ ἐθέλουσι πινεῖν;*

ている*16。[A] の箇所に欠落を想定する Müller らの解釈や、ἀλλὰ を補う提案も同様の意図である*17。[A] の区切り以後は、「(しかし、) 生よりも死がより善い時や人々がある」といった意味になるが、その場合、βέλτιον τεθνάναι ἢ ζῆν は τυγχάνει に支配されず、ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の内容として ἔστι を補って理解される*18。だが、この構文理解では [A] 以降が asyndeton になる難点に加えて、οὐδέποτε τυγχάνει τῷ ἀνθρώπῳが十全な意味をもたない危惧がある*19。

こういった諸難点は、[A] で区切らずに [B] までを挿入節とすることで回避される。この句読法は Wohlrab, Vicaire が採用しており*20、「他の事柄が、ある時、ある人々にとってそうであるように」と訳される。この句読法では、前後の οὐδέποτε τυγχάνει … βέλτιον (ὂν) τεθνάναι ἢ ζῆν が素直に連結するため、構文上の不整合はなくなる。また、καὶ τἆλλα ἔστιν ὅτε は οὐδέποτε の全否定と対照をなすため、主文と逆の場合を示す挿入節となる。また、ἔστιν οἷς も主文の τῷ ἀνθρώπῳ (類としての「人間」) と明瞭な対照を示すことになり、[B] で区切る利点となる。この場合、ἔστιν ὅτε καὶ οἷς は挿入句ではなく、ὥσπερ 節内の文をなす。

翻って考えると、これまで ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の構文上の処理ができないまま、無理な、あるいは文法的に不可能な解釈がなされてきたのは、オリュンピオドロスやシンプリキオスに遡る伝統的理解の影響ではなかったか。彼らはプラトン哲学の根本が「死は絶対的に生より善い」との立場にあると前提し、その考えがここでも表明されていると取っていた*21。「肉体は魂の牢獄」や「死の訓練」といったオルフェウス＝ピュタゴラス教色の強い死生観が読み込まれ、それゆえギリシア語で素直に「生より死がより善いことは決してない」と読まれるべき文章が、真逆に解釈されたのであろう。ἔστιν ὅτε καὶ οἷς を組み込む

*16 Cf. Tarán (1966). その場合にも asyndeton の難点は残るが、この句読法を Gallop (1975), 82 は評価して、自身の提案 (v) につなげている。

*17 Müller (1959), 341: τἆλλα ⟨διάφαρόν τι ἔχων. οὐ γάρ που ζῆν ἀεὶ καὶ πᾶσι καλόν, ἀλλ'⟩ ἔστιν ὅτε. [διάφαρόν は διάφορόν の誤りであろう] Cf. Tarán (1966), 335, n. 31.

*18 従って、Burnet による a4 ὂν の分詞挿入は、彼自身が提案する構文には必要という訳ではないが (cf. Verdenius (1958), 198)、このような別の構文を排除する意味をもつ。

*19 この点は、Bonitz (1886), 319、及び、Tarán (1966), 335, n. 31 の批判を参照。

*20 Wohlrab (1907), 39: "Wie alles andre, was in der Regel ein Übel ist, doch unter Umständen (ἔστιν ὅτε) und für manche Personen (ἔστιν οἷς) ein Gut ist"; cf. Bonitz (1886), 319–320. Vicaire (1983), 9: "comme dans les autres cas, où l'on tient compte des circonstances et des personnes" (Budé 版テクストも Robin (1934) から変えられている)。

*21 Olymp. *in Phd.* I §19 (Westerink): θαυμαστόν σοι φαίνεται ὅτι τῶν ἄλλων πάντων ἐπαμφοτεριζόντων καὶ ἀγαθῶν καὶ κακῶν δυναμένων εἶναι, οἷον πλούτου, ξίφους, ὁ θάνατος μόνως ἀγαθός ἐστιν. Simpl. *in Epicteti Enchiridion*, 28.33–37 (Dübner): ὁ δέ γε Πλάτων, καὶ ὁ τοῦ Πλάτωνος Σωκράτης, καὶ ἀγαθὸν αὐτὸν (sc. τὸν θάνατον) εἶναι, καὶ κρείττονα τῆς μετὰ τοῦ σώματος ζωῆς, ἀποφαίνεται· οὐ τοῖς μὲν, τοῖς δὲ οὔ· ἀλλ' ἁπλῶς πᾶσι. λέγει οὖν ὁ ἐν τῷ Φαίδωνι Σωκράτης, κτλ.

無理な構文理解が、その改釈の基盤となった。そして、古代末期からつづくその伝統を、日本の訳者たちはそのまま受け入れてきたのである。

ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の構文上の処理だけで 62a2–7 全体は理解できないが、（写本上の問題がないという前提で）まずはギリシア語として正しい構文理解に立ち、その上で解釈の選択肢を重ねるべきであろう。以下に試訳を示す。

> 「しかしながら、おそらく君には驚くべきことに思われるだろう。他のすべてのことの中で、このこと〔自殺をしてはならないこと〕[*22] だけが端的に成り立っており、つまり正に、他の事柄が、ある時、ある人々にとってそうであるのとは異なり、人間にとって生きるよりも死んでいることが善いということが決してないとしたら。あるいは、死んでいることがより善い人たちがいた場合でも、その人たちにとって自身に善きこと〔自殺〕を行うのが敬虔ではなく、他の手助けをしてくれる人を待っていなければならないとしたら、君にはおそらく、驚くべきことに思われるだろう。」

「自殺」が神によって絶対的に禁止されているということは、言い換えれば「生が死より善い」がすべての人間に適用されること、更に、一般に死んだ方が善いと考えられる人々の場合でも、自殺は不敬虔であることを意味する。この考えは、ヘラクレスやアイアスやアンティゴネらの自殺を英雄伝説とするギリシア人にとって、驚くに値する。その禁止の理由を説明した後、ソクラテスは神があえてそれを命じられる場合には例外となることを述べ、自身の状況がそれに当てはまることを示唆している（62c6–8）。62a2–7 の一節は、ケベスに代表される一般の聞き手が「自殺禁止」に対して抱く反応を要約することで、そのパラドキシカルな性格を際立たせる、ややレトリカルな文章であるように思われる[*23]。

（慶應義塾大学）

---

*22 「このこと」が何を指すかについて、（1）死が生より善いこと（オリュンピオドロス、シンプリキオス、Bluck、日本語の訳者たち）、（2）生が死より善いこと（Burnet, Hackforth, Rowe）、（3）自殺をしてはならないこと（Archer-Hind, Loriaux, Gallop）で解釈が分かれている。私は（3）の解釈がこの前後の文脈に相応しいと考える。

*23 草稿の段階で、大芝芳弘、佐野好則両氏から貴重なご意見と資料をいただいた。お礼申し上げたい。

参考文献

Archer-Hind, R. D., *The Phaedo of Plato*, edited, with introduction, notes, and appendices, 2nd edition, London, 1894.

Bluck, R. S., *Plato's Phaedo*, translated, with introduction, notes, and appendices, London, 1955.

Bonitz, H., 'Zur Erklärung von Platons Phaidon p. 62A', *Platonische Studien*, 3 Aufl., Berlin, 1886, 313–323.

Burnet, J., *Platonis Opera* I, Oxford Classical Texts, Oxford, 1900, 1905².

Burnet, J., *Plato's Phaedo*, edited with introduction and notes, Oxford, 1911.

Cooper, G. L., *Attic Greek Prose Syntax*, vol. 2, Ann Arbor, 1998.

藤沢令夫訳、プラトン『パイドン』(世界文学大系 3『プラトン』)、1959；(世界古典文学全集 14『プラトン I』)、1964；(筑摩世界文学大系 3『プラトン』)、筑摩書房、1972.

Gallop, D., *Plato's Phaedo*, translated with notes, Oxford, 1975.

Geddes, W. D., *The Phaedo of Plato*, edited with introduction and notes, Edinburgh, 1863.

Hackforth, R., *Plato's Phaedo*, translated with an introduction and commentary, Cambridge, 1955.

池田美恵訳、プラトン『パイドン』(『プラトン名著集』)、新潮社、1963；(世界の名著『プラトン I』)、中央公論社、1966；プラトーン『パイドーン』、新潮文庫、1968.

岩田靖夫訳、プラトン『パイドン』、岩波文庫、1998.

菊池慧一郎訳、プラトン『パイドン』、岩波書店、1924.

Kühner, R., Blass, F. und Gerth, B., *Ausfürliche Grammatik der griechischen Sprache* II-2, 4 Aufl., Hannover, 1976.

Loriaux, R., *Le Phédon de Platon* I, commentaire et traduction, Namur, 1969.

松永雄二訳、プラトン『パイドン』(岩波『プラトン全集』1)、岩波書店、1975.

水崎博明訳、プラトーン『パイドン』(『プラトーン著作集』1–2)、櫂歌書房、2011.

Müller, G., 'Platons Paidon ed. Dirlmeier; *Plato's Phaedo*, ed. Hackforth', *Gnomon* 31 (1959), 340–346.

村治能就訳、プラトン『パイドン——魂不滅論——』、綜合出版社、1947；『パイドン——魂について——』、角川文庫、1968；(角川『プラトン全集』1)、角川書店、1973.

岡田正三訳、プラトン『パイドン』(『プラトン全集』1)、第一書房、1942；(『プラトン全集』1)、全国書房、1946；(『プラトーン全集』1)、全国書房、1969.

朴一功「プラトンの「自殺禁止論」」、『京都大学古代哲学研究会紀要』3 (1993)、1–13.

朴一功訳、プラトン『パイドン』(西洋古典叢書)、京都大学学術出版会、2007.
Robin, L., *Platon, Phédon*, texte établi et traduit, Budé, Paris, 1934.
Rowe, C. J., *Plato, Phaedo*, Cambridge, 1993.
Strachan, J. C. G. ed., Plato, *Phaedo*, *Platonis Opera* I, Oxford Classical Texts, Oxford, 1995.
Tarán, L., 'Plato, *Phaedo*, 62A', *American Journal of Philology* 87 (1966), 326–336.
Verdenius, W. J., 'Notes on Plato's *Phaedo*', *Mnemosyne* 11 (1958), 193–243.
Vicaire, P., *Platon, Phédon*, texte établi et traduit, Budé, Paris, 1983.
Wohlrab, M., *Plato, Phaidon*, 4 Aufl., Leipzig und Berlin, 1907.

フィロロギカ——古典文献学のために　第 VIII 号

2013 年（平成 25 年）5 月 31 日発行

編集・発行　フィロロギカ編集委員会
（古典文献学研究会）
〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目
北海道大学文学研究科　安西眞研究室
Tel: 011-706-4093（直）
Mail: philologica@hotmail.co.jp

印刷・製本　（株）アイ・スィー・アイ・渡辺印刷

頒価　2000 円

ISSN 1884-1562

Philologica VIII 2013

Societas Philologorum

(Secretary) Yasunori KASAI

Editorial Board:
(Hon.) Masaaki KUBO
(Hon.) Elizabeth CRAIK
Makoto ANZAI, Yoshihiro OSHIBA, Hiroyuki TAKAHASHI,
Noburu NOTOMI, Yoshinori SANO

Contents

Funeral Honor in the *Aeneid* 1
Hiroyuki TAKAHASHI

Some Lycian Inscriptions and *Ilias* 4.438 25
Atsuko HOSOI

Shorter Note

Plato, *Phaedo* 64A, "ἔστιν ὅτε καὶ οἷς" 47
Noburu NOTOMI